

總則

陸軍恩給令

第一條 陸軍恩給ハ軍人奉仕中諸種ノ功勞ニ依テ獲ル者ニシテ其種類ヲ別ツテ左ノ如シ

第一 恩給 服役停年ト傷痍疾病トニ由ル者ナリ

其給額ハ服役ノ長短傷痍疾病ノ輕重其軍人ノ官階並ニ在職中ノ停年ニ從テ各差等アリ

第二 寡婦扶助料 其給額亦其夫ノ官階ト死没ノ緣故トニ由テ差アリ

第三 孤兒扶助料 其給額上ニ同シク差アリ

第四 罷役後恩給 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役十五年以上ノ者ニ給スル所ニシテ其給額服役停



年ノ長短ニ準ス

以上四種ノ恩給並ニ扶助料ハ大藏省ヨリ別途ニ支給スル者ナリ

第五 罷役俸 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同

等ノ輩服役十一年ヨリ十五年未滿ニテ罷役ニ入ル者ニ給スル所  
ナリ

第六 罷役恤金 恩典トシテ壹號休暇ヲ賜ヒ歸郷セシメタル下士

兵卒並ニ同等ノ輩ニ給スル所ナリ

以上二種ノ給料ハ陸軍ノ各年定額表ニ載セテ陸軍省ヨリ支給ス  
ル所ニシテ罷役俸並ニ罷役恤金令アリ後ニ附ス

第二條 恩給寡婦扶助料罷役後恩給ノ三種ハ其本人ニ生涯之ヲ給ス  
ヘシ

孤兒扶助料ハ其孤兒男女共ニ二十歳ニ至レハ之ヲ止ム

罷役俸ハ其上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ  
輩服役停年ノ半期ニ准シテ  
タトヘハ服役停年十二年ナ  
レハ其半期即チ六年トス 其年間之ヲ  
給シ罷役恤金ハ二ケ年ヲ以テ限リトス然レモ之ヲ更新スルコトヲ  
得ヘシ

第三條 凡ソ此各種ノ支給料ハ當該人各存生ノ中ハ之ヲ支給シテ停  
止スルコトナシ但シ公借隊内借財並ニ身代限ニ處セラル、時モ其  
引ク所給額五分ノ一ニ過ルヲ得ス

第四條 凡ソ陸軍恩給ヲ受ルノ權ハ次ノ事故アレハ之ヲ止メ或ハ其  
時間之ヲ停ム

第一 破廉耻甚ノ者或ハ笞刑或ハ懲役實決以上ノ處斷ヲ受ル時



第二 事故アリ日本人タルノ分限ヲ失フ者

第三 政府ノ許可ナクシテ帝國外へ出ル者

第五條 恩給停年ニ基ツク者ハ最下限ヨリ最上限マテノ差等アリ最

上限ニ越ルコトハ此後第十一條第一節及ヒ第七十八條ニ揭示スル者ニ係ルノ外絶テ有ルコトナシ

第六條 最下限ヲ受ルノ權ハ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍

樂各部右同等ノ輩服役實期二十五年ニ滿ル者之ヲ獲ヘシ又上長官

士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期二十年

ニ滿ルノ後一時ノ疾病ニ由リ三年以上非職タリシ者查問會議ニ因

テ再ヒ現役ニ復ス可ラサル者ナリト處決スル時ハ其官階ニ準スル

最下限ノ恩給ヲ受ルノ權利ヲ有ス但シ從軍年ヲ算入スルノ恩典ナ

シ

下士兵卒服役實期十五年ニ滿ル者ハ最下限ノ恩給ヲ受ルノ權利ヲ

有ス

第七條 恩給ノ最上限ハ服役四十五年ニ滿ルノ上長官士官准士官並

ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩三十五年ニ滿ルノ下士兵卒並

ニ同等ノ輩之ヲ受ルノ權利ヲ有ス

此故ニ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ

滿二十五年以上下士兵卒並ニ同等ノ輩ハ滿十五年以上毎年最下限

ヨリ最上限ニ至ル差二十分一ノ比例ヲ以テ其受ル所ノ給額ヲ増加

ス但シ此年數ニ從軍年ヲ算入スルハ後ノ第四十二條ニ揭示スルカ

如シ



第八條 戰地若クハ公務中偶然ノ事故ニ由テ重傷ヲ受ケ不治ニ至ル者ハ恩給ヲ受ルノ權利ヲ有セシム  
 重病ノ人陸軍服役ノ疲勞危難ヨリシテ發シ不治ナリト認メラル、者亦同シク此權利ヲ有セシム

第九條 其傷痍疾病或ハ盲目トナリ或ハ切斷ニ由リ又ハ其傷病ニ由リテ全ク一肢以上ノ用ヲ失フ者ニハ直ニ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有セシム然レニ其傷痍疾病右ノ重症ニ比シテ一層輕キ者ハ次ノ事情アルニ至ラサレハ之ヲ有セシムルコトナシ

第一 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ其傷病ニ因テ現役ニ堪ヘサル者年ヲ經ルト雖モ竟ニ復役スヘキ

目途ナキ時

第二 下士兵卒並ニ同等ノ輩ハ其傷病ニ因テ服役スヘカラスシテ糊口ヲナスコト能ハサル時

第十條 上條ノ道理ニ基ツキ凡テ服役ノ事ニ關カラサル疵傷其他體質薄弱若クハ老衰若クハ世上一般ノ疾病ニ罹ル者ハ此限ニアラス  
 第十一條 恩給ヲ給スルノ本則ハ其由テ以テ此ニ至ラシムルノ原因ノ輕重ニ準シテ差等アルコト次ノ如シ

第一 其兩眼ヲ盲シテ不治ニ至ルト並ニ切斷ニ由テ二肢ヲ亡スト此ニツニ罹ル軍人ハ何ノ官階ヲ論セス停年恩給ノ最上限ノ上ニ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ其給額百分ノ二十下士兵卒並ニ同等ノ輩ハ百分ノ三十ノ増額ヲ受ク但シ其服役ノ長短ヲ論スルコトナシ



第二 一肢ヲ切斷シ若クハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至ル軍人ハ何ノ官階ヲ論セス唯最上限ノ額ヲ受ク但シ其服役ノ長短ヲ論スルコトナシ

第三 其傷痍疾病全ク一肢ノ用ヲ失フニ至リ若クハ之ヲ失フコトナキモ之ヲ失フニ等シト認ムル所ノ軍人ハ何ノ官階ヲ論セス又其服役ノ長短ヲ問ハス先ツ停年恩給ノ最下限ヲ以テ之ニ當テ而シテ後ニ服役ノ年度ニ照シ恩給最下限ヨリ最上限ニ至ル差ノ二十分一ヲ加ヘタル給額ヲ受ルノ權アリトス然レモ其給額最上限ノ高ニ至レバ其上増加スルコトナシ但シ此服役年數ニ從軍年數ヲ算入スルニ係ルハ

第四 其傷痍疾病前項ニ比スレハ一層輕キモノニシテ自己ノ用辨

ニ差支ナキモノハ最下限ノ額ヲ一時限リ給ス但シ服役停年從軍年ヲ

算入ニ由リ最下限ノ恩給ヲ受クルモノハ此一時限リハ給セスト

雖モ其罷役後恩給或ハ罷役俸並ニ恤金ヲ受ルニ止マルモノハ別

ニ此一時限リヲモ給スヘシ

第十二條 其他後ノ第七十九條ニ揭示スル所ニ係ル者ハ給額ノ差數五分ノ一ヲ以テ之ニ増加スルコトヲ得ヘシ

寡婦孤兒  
扶助料

第十三條 恩給ヲ受クヘキ夫ノ死後ニ於テ其夫ノ官階ニ屬セル停年恩給ノ最上限ノ半數ト定メ生涯之ヲ受ルノ權ヲ有スル寡婦ハ次ノ如シ

第一 戰地若クハ公務ニ於テ殺害ヲ受ケタル軍人ノ寡婦

第二 内地若クハ日本外ノ軍中ニ於テ或ハ戰爭ノ事故ニ由リ或ハ



傳染疫癘ニ罹リ其他服役ノ義務ヲ奉スル爲ニ死没シタル軍人ノ  
寡婦

第三 戦地ニ於テスルト公務ニ於テスルトヲ論セス其傷痍ニ源因  
シテ終ニ死ニ至ル軍人ノ寡婦

第十四條 恩給ヲ受クヘキ夫ノ死後ニ於テ其夫ノ官階ニ屬セル停年  
恩給最上限ノ四分一ニ均シキ給額ヲ生涯受ルノ權ヲ有スル寡婦ハ  
次ノ如シ

第一 其夫既ニ恩給ヲ受テ死シ後ニ遺レル寡婦

第二 其夫未ダ之ヲ受ケスト雖モ受クヘキ權ヲ有シテ死シ後ニ遺  
レル寡婦

總テ寡婦ハ陸軍卿ノ許可ヲ受ケ合式ノ婚配ヲ行ヒ其夫ノ現役ヲ去

ルノ前即チ陸軍俸給ヲ離ル、時ヨリ一ケ年以前ニ嫁シタル者タル  
ヘシ然レモ其夫致仕ノ以前ニ前時ノ配偶若クハ此配偶ヨリ生レタ  
ル兒子アレハ嫁時ノ年月ヲ查確スルニ及ハス

第十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スルキハ扶助料ヲ望ムノ權ナ  
シ此場合ニ於テハ兒子本腹妾腹ヲ分タス其戸籍ニ登記セルモノアル者ハ之ヲ孤兒ト  
見做スヘシ

第十六條 其寡婦死去シ或ハ再婚等ノ事故アリテ其扶助料ヲ受ルノ  
權消絶スルキハ其權其軍人ノ一子若クハ數子ノ幼年ナル者アレハ  
其數ニ拘ラス是ニ轉移シ寡婦ノ受クヘキ扶助金ト均シク年々其扶  
助料ヲ受クルヲ得ヘシ

第十七條 此道理ニ基ツキ其軍人ノ死スル前ニ母ノ死シタル孤兒ハ



其母ノ受クヘキ扶助料ヲ直ニ受クヘシ

第十八條 凡ソ養子ハ唯嗣子タル者ニ限り二十歳未滿ナレハ之ヲ受クルノ權利ヲ有ス若シ其軍人生前ニ其女子ヘ養子ヲナスト雖モ未婚中ナレハ第十六條ノ例ニ準スヘシ但シ其養子ト婚配スレハ男女トモ其權消絶ス

第十九條 此扶助料ハ孤兒幼年ノ間ニ限ル者ニシテ男女共ニ二十歳ニ至ルマテヲ期トシ其期ニ達スレハ其權轉シテ次子ニ移ル者トス  
第二十條 服役停年ニ付テ退職ノ恩給ヲ願フハ服役定期全ク滿ツルノ前ニ非レハ之ヲ願フコトヲ得ス

第二十一條 此故ニ各軍隊ニ於テハ毎年一次ノ外ハ退職恩給願ヲ軍人ニ許可セサルヲ以テ常則トス

退職料ヲ願フ總則

其願書ハ總テ各年檢閱使定期檢閱ノ前一箇月ニ於テ証據ニ供スヘキ書類ヲ副ヘ之ヲ本隊ノ會計會議ニ移呈スヘシ

此會議ニテ願人ノ申告シタル事實ヲ查照シ其服役ノ明細書並ニ願意ノ証據ニ供スヘキ書類ニ調印シ其是非ヲ當人ニ説諭シ而シテ後ニ總テ此書類ヲ檢閱使ニ呈スヘシ  
此例ニ外ナル者左ノ如シ

第一 其下士以下隊内ニ在ル者定期十五年ニ滿ルノ時ニ入隊ノ約期モ盡ル者ニ就テハ此期限前ニ合式ノ願書ト証據ニ供スヘキ書類トヲ併セテ入隊約期滿限ニ至ル日ニ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈スヘシ此場合ニ於テハ該官ハ檢閱使ノ任ヲ行フヘシ

第二 戰地ニ於ケル重傷重病ノ事故ニ基ツキタル恩給ハ總テ之ヲ



急速ニ取扱フヘシ故ニ此場合ニ於テハ一團隊ノ首帥檢閲使ノ任ヲ行フヘシ

第三 其他急速ヲ要スル場合ニ於テハ四季ノ閱兵ノ時ニ鎮臺ノ司令將官自ラ檢閲使ノ任ヲ行ヒ或ハ部下ノ司令官ヲシテ之ヲ代理セシムルコトアルヘシ

第二十二條 凡テ恩給ノ進達文ハ其緣故ヲ開列シ服役並ニ從軍ノ事實ヲ表章シテ願人ヲシテ恩給ヲ受領スルニ適當ナラシムルヲ以テ主トスヘシ

第二十三條 其軍人軍隊中ニ編制セラレタルキハ其軍隊ノ會計會議ノ注意ヲ以テ其願書ヲ呈セシムヘシ

第二十四條 其進達文ノ外ニ次ノ書類ヲ悉ク取揃ヘ一纏メトナシテ之ヲ呈スヘシ

第一 願人ノ緣故ヲ開列シタル願書 是ハ會計會議又ハ之ヲ所轄スル官廳等ノ長官ニテ署名調印ス

第二 身元履歷書 是ハ郷貫職業移住年月等ヲ詳カニシ且生年ヨリ陸軍出身マテノ履歷ヲ表シ兼テ父母妻子等ノ姓名ヲ載セタル者

第三 服役並ニ從軍ノ明細書 是ハ隊中ノ帳簿ヨリ凡テ該名ニ關係スル條款ヲ抄出シタル者但シ此書ニハ本人調印スヘシ

第四 上包 是ハ會議又ハ此願書ヲ移轉スル官人ニテ作ル所ニシテ番號並ニ包中書類ノ番號ヲ表記シ願書並ニ附屬ノ諸書類ヲ之ニ包收シ仍ホ其遺脱ヲ防ク爲ニ絲帶ヲ施スヘシ



第二十五條 此書類ハ檢閱使若クハ四季ノ閱兵ヲナス將官ノ閱兵期日一箇月前ニ其管ノ司契ニ送付シ司契之ヲ合格ナリト認ムルキハ檢印署名シ該臺ノ司令將官ニ呈シ將官一覽ノ上異議ナキニ於テハ直ニ會議ニ返送シテ其檢閱ヲナス將官ニ呈セシムヘシ

將官其人名ヲ檢査スルノ後會議ヲシテ恩給許可ヲ請フノ進達帖ヲ作ラシメ而シテ監督查照ヲ遂ケ將官之ヲ可トスルノ後其帖ト諸書類並ニ其願書ニ就テ自己ノ意見ヲ記シタルトヲ併セラ其包内ニ入レ之ヲ陸軍卿ニ呈スヘシ

第二十六條 其軍人或ハ隊中ニ在リ或ハ他ノ廢署等ニ屬シテ遠隔ノ地ニ在リ送達爲シ易カラサルキハ鎮臺ノ司令將官ノ命ヲ以テ司契ヨリ其出ス所ノ願書ヲ近傍ニ駐劄スル兵隊ノ會計會議ニ送達シテ

事ニ從ハシム

第二十七條 陸軍卿ハ其軍人服役ニ堪エサル者アレハ公命ニテ之ニ退職恩給ヲ願ハシムルコトアルヘシ

其願書送呈ノ法ハ前數條ニ擧ケタル所ニ異ナルコトナク又傷痍疾病ニ由ルモノハ後ノ第四十九條ニ擧ルカ如シ

上長官士官並ニ會計軍醫馬醫各部右同等ノ輩ニ對シテハ陸軍卿ヨリ旨ヲ諭シ准士官以下ノ服役十五年ニ滿チタル者ハ其隊ノ長官其服役ニ堪エサルヲ認メタル時ハ其旨ヲ諭シテ退職ヲ願ハシムルコトヲ得然レモ其願書ハ猶其部ノ檢閱使ノ手ヲ歷テ陸軍卿ニ呈スヘシ

第二十八條 其他軍人ハ一定ノ年齢ニ至リタル時其退職恩給ヲ獲ルコトニ就テ定メタル年限滿期ノ者ハ其服役ヲ辭シテ致仕スルヲ例ト



ス其年齡定限ハ左ノ如シ

監督 軍醫監 藥劑監

六十

參謀大中佐 副監督 司契 軍吏正 軍醫正 藥劑正 馬醫監

五十七

大中佐 參謀少佐 監督補 司契副 軍吏 軍醫 劑官 馬醫

五十四

少佐 參謀大尉 軍吏副 軍醫副 劑官副 馬醫副

五十一

大尉 參謀中尉 軍吏補 軍醫補 劑官補 馬醫補

四十八

砲工兵上等監護 砲工兵監護 監査 諸工長 同下長

四十五

中少尉 下士 兵卒 并ニ同等ノ輩

三十五

第二十九條 前條ノ年齡定限アリト雖モ猶任用ニ堪エ若クハ材能特

抜ナル者ニ於テハ上長官士官並ニ會計軍醫馬醫各部右同等ノ輩ハ

陸軍卿ヨリ留任ヲ命シ准士官以下ハ所部ノ長官ヨリ請求シテ留任

ヲ請フヲ得ヘシ但強テ致仕ヲ願フハ比例ニ在ラス

第三十條 其他軍法會議ノ列位要塞參謀科文庫主管等老練ノ人ヲ要

スル職務ハ皆陸軍卿上條ノ例ニ準シ時宜ニ依テ之ヲ取捨スヘシ

第三十一條 凡ソ恩給ノ爲ニ服役年限ヲ算計スルノ法ハ陸軍ニ於テ

ハ二十歳未滿ヲ算スルコトヲ得ス二十歳未滿ノ者ハ當人自己ノ意

ヲ以テ就役ノ約ヲ結ビ得サルモノトス

第三十二條 服役年限ノ始期ハ左ノ如シ

其一 明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖

モ都テ同月ヲ以テ始トス

其二 徵兵ハ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算スヘシ

其三 壯兵其他諸種ノ方法ニテ入隊ヲ得ル者ハ入隊當日ヨリ起算

服役期限  
算則



第三十三條 徴兵補充兵ノ後來入隊シタル者恩給ヲ受ルニ至ルノ期ハ其補充兵在役ノ期ヲモ算シ常備入營期日即チ四月二十日ヲ以テ起算スヘシ

第三十四條 其軍人一時旗下現役ニ就クノ後轉シテ後備軍士以上ニ入ル者ハ何等ノ名義タルヲ論セス後備軍ニ在ルノ時日ヲ服役實期トシテ之ヲ算ス此條現今未

第三十五條 其軍人海軍ニ奉仕シ其恩給ヲ受ルノ權ヲ有スル者合格ノ故ヲ以テ轉シテ陸軍ニ奉仕スルハ以前海軍服役ノ實期ヲ以テ陸軍服役ノ實期ト通算スルコトヲ得

文官ヨリ武官ニ轉スル者ハ以前奉仕ノ時日ヲ以テ陸軍服役實期ト

通算スルコトヲ得ス

第三十六條 服役ノ算計第三十一條ノ如シト雖モ陸軍士官學校生徒並ニ教導團生徒成業ノ上士官下士ニ任スル者ハ其學期ノ若干ヲ論セス概シテ就任ノ前二年ヲ通算スルコトヲ得幼年學校ノ生徒ハ滿十七歳ニ至リシヨリ通算スルコトヲ得軍醫部ノ士官以上ハ軍醫劑官ノ別ナク又陸軍軍醫學校ヨリ出身スルト他ヨリ出身スルトヲ論セス其軍醫補ニ任スルノ日ヨリ前三年ヲ通算スルコトヲ得  
馬醫部ノ上長官士官下士モ亦軍醫ト同シク馬醫生ニ任ズルヨリ前二年ヲ通算スルコトヲ得ヘシ  
以上生徒通算ノ年數如斯定ムト雖モ學校長官ノ証書ニ因リ或ハ之ヲ延縮スルコトアルヘシ



第三十七條 其他火工銃工等ノ生徒ハ十七歳以上ハ奉命ノ日ヨリ十七歳以下ハ滿十七歳ニ至リシヨリ停年恩給ヲ受ルノ例ニ算入スルヲ得

第三十八條 若シ國民軍ヲ現役ニ徵發スルコト有テ既ニ恩給ヲ受テ退職シタル軍人再ヒ國民軍現役ニ就ク時其恩給ハ其現役ノ給料ト共ニ之ヲ受ルコトヲ得ヘシ然レモ前後ノ服役實期ヲ通算シテ其恩給ヲ増加スルヲ得ス但シ從軍傷痍疾病ノ事アレハ其時ノ殊典ニ從フ

第三十九條 其上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期末タ二十五年ニ滿タサル前免官セラレ後再ヒ現役ニ復シタル者ハ免官以前ノ服役時日ヲ恩給ノ期限内ニ算入スルヲ得

但シ中間間斷ノ時日ハ之ヲ除クヘシ(非職ハ其非職中ノ年數モ合算ス)

其官階前後同等ナル時ハ直チニ其官階ニ属スル恩給ニ從フ然レモ復役ノ時ノ官階前時ヨリ降ル時ハ退職ノ月其官階ニ属スル恩給ノ外ヲ望ムノ權ナシトス

第四十條 逃亡以前ノ服役モ亦其以後ノ服役ト通算スルコトヲ得ヘシ然レモ後ノ服役ハ處刑後復隊ノ日ヨリ起算ス

第四十一條 凡ソ軍人服役中懲罰五日以上ニ上ル者ハ除テ算セス其除算ノ法七日マテハ一ヶ月ヲ除キ二十七日ハ二ヶ月ヲ除キ三十七日ハ三ヶ月ヲ除キ四十七日ヨリ三ヶ月迄ハ半年ヲ除キ三ヶ月以上六ヶ月十五日迄ハ一年ヲ除キ餘ハ其實期ヲ算シテ之ヲ除ク例ハ十六日ハ一年



從軍年ノ  
算則

ト一日ヲ除キ六ヶ月ト二十五日  
ハ一年ト十日ヲ除ク以下皆准之

第四十二條 軍人停年恩給ヲ受クヘキ服役期限ニ達スル者ハ其年限  
ノ中ニ從軍年ヲ算入スルヲ許ス其法左ノ如シ

第四十三條 其實期ノ中ニ從軍年ヲ二倍シテ算入スルハ  
戰時日本外ノ戰地服役

第四十四條 其實期ノ中ニ從軍年ヲ全年トシテ算入スルハ

第一 内地戰時ノ定ニテ戰鬪ニ因テ世ノ靜謐ヲ復スルニ與カリテ  
カアル時

第二 戰時平時ヲ論セス日本外ノ地ニ於テ鎮戍シタル軍隊ニ在ル  
時

第三 海戰ノ時ニ當リ其船中ニ在ル時

第四 平時新嘉坡ヨリ西ヘ聖佛朗士西哥ヨリ東ヘ差遣シテ服役セ  
シメタル軍人

第五 北海道ノ衛戍其他該地ニ半年以上札駐スル兵役ニ服シタル  
軍人

第四十五條 實期ノ中半數トシテ之ヲ算入スルハ  
海戰ノ時ニ當リ海岸防禦ノ服役

第四十六條 戰時虜獲ニ逢ヒ外國ヘ俘囚トナリタル時日ハ猶現役ニ  
在ルカ如ク之ヲ算ス

第四十七條 凡ソ恩典トシテ從軍年ヲ算スルノ法ハ其期十二ヶ月ニ  
足ラサル者ト雖モ之ヲ滿一年トシテ算ス然レモ十二ヶ月間假令ヒ  
數回ノ軍役ニ從フト雖モ之ヲ二年以上トシテ算スルコトヲ許サス



其一期一年以上ニ跨カリ十二ヶ月ニ餘ル所ノ分數ハ之ヲ全一年トシテ算スルコトヲ得

第四十八條 從軍年ヲ算入シ及ヒ刑罰ニ因テ除キタル年月ヲ折算シテ其計算ヲ進達書ノ裏面ニ記載スベシ

第四十九條 凡ソ傷痍疾病ニ由テ退職恩給ヲ願ハント欲スル者ハ其服役ヲ離ル、前ニ之ヲ願フヘシ

第五十條 如此キ軍人ハ傷痍疾病ノ原因ニ依リ合格ノ年齢ノ前ニ恩給ヲ得ント欲スルヲ以テ其傷痍疾病ノ原因症候トモ極メテ曲節ヲ悉シ之ヲ陳述スルコト必要タリ

第五十一條 其傷痍疾病ヲ受ケシ事故並ニ原因ハ之ヲ証明スヘキ公ケノ報告若クハ他ノ公文ニ係ル書類ヲ據証トナシ疾病ヲ受ケシ時

傷痍疾病ノ願書ニ就テ別段ノ處置

刻並ニ其時ノ景況ハ陸軍官憲ノ(戰地ノ司令官分遣隊ヲ司令スル下士大隊長幕員士官等ニテ二人若クハ三人ノ証人ノ前ニテ認メタル)證書ヲ據証トシ又ハ其官憲ヨリ發シタル報告若クハ查問會議ノ書ヲ據証トナスヘシ

右ノ據証ニ供スル書中ニハ其傷痍ノ性質及ヒ之ヲ受ケタル時刻之ヲ受ケタル地所並ニ戰爭間ニテモ、公務上ニテモ之ヲ受ケタル時ノ景況ヲ特別ニ奉章シ又凡テ醫家ノ診斷ニテ不治トナス者ハ悉ク之ヲ記載スヘシ

第五十二條 其傷痍疾病ノ不治タルユトハ陸軍病院ノ病院長若クハ最後ノ治術ヲ施シタル市井病院ノ醫長ヨリ特別ノ證書ヲ以テ之ヲ確証スル者ニシテ此證書中ニ傷痍疾病ノ原因症候是ニ施シタル醫



療ノ方法ヲ述ヘ以テ其不治タルヲ明カニ申述スベシ  
其軍人右ノ病院ニ就テ治療ヲ受ケサル者ニハ陸軍病院若クハ市井  
病院ノ醫長診察ノ上ニテ証書ヲ授クヘシ

第五十三條 退職ノ願書ハ其軍人ノ屬スル隊ノ會計會議若クハ鎮臺  
司令將官ヨリ指定シタル隊ノ會計會議ヨリ其保證書類ト共ニ司契  
ニ送付ス司契此書類凡テ例規ニ合ヒタルモノト認ルキハ之ニ檢印  
署名シ之ヲ鎮臺司令將官ニ呈ス是ニ於テ司令將官ヨリ軍醫正二員  
並ニ初メ証書ヲ認メタル者ノ外其隊ニ屬スルト他隊ニ屬スルトニ  
論ナク軍醫若クハ軍醫副補ノ内二人ヲ命シ之ヲ檢査セシム

第五十四條 其命セラレタル所ノ軍醫ハ司契並ニ其隊ノ會計會議員  
ノ前ニテ檢査ヲナシテ後檢査口供ヲ作ルヘシ而シテ此時兩軍醫ノ

診斷否ナル時ハ其恩給願ハ他日ニ延ハシ司契ハ兩軍醫ノ口供書ヲ

取リ之ヲ記室ニ納ムヘシ總テ檢閱使又ハ平常ニテハ鎮臺司令將官  
ハ如此キ場合ニ於テハ其兩軍醫ヲシテ手術ヲ行ハシムルヲ得

第五十五條 其兩軍醫ノ檢査ニテ當該軍人退職恩給ヲ受ルノ權アリ  
ト認ムル時ハ兩軍醫更メテ診斷書ヲ作ルヘシ此証書ハ別ニ一通ノ  
寫ヲ作り先ノ口供書ニ綴リ込ミ一包トナシテ檢閱使又ハ檢閱ヲナ  
ス司令將官ニ呈スベシ

第五十六條 檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官ハ此書類並ニ檢査口供  
書ヲ一覽シタル後先キニ命シタル二員ノ軍醫正ヲシテ其面前ニテ  
查覈ヲナサシムヘシ

而シテ司契ハ此查覈ヲ助ケ此查覈ニ就テ再ヒ口供書ヲ作り而シテ



二員ノ軍醫正ハ新ニ証書ヲ作テ其口供書ニ綴リ込マシムヘシ

第五十七條 此查覈ヲ經テ願意本ツク所アリト認メタル時ハ檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官之ヲ會計會議ニ下シ退職恩給許可ヲ請フノ進達帖ヲ作ラシメ而シテ監督查照ヲ遂ケ將官可トスルノ後其帖ト諸書類並ニ其願書ニ就テ自己ノ意見ヲ記シタルト併セテ其包内ニ入レ之ヲ陸軍卿ニ呈ス

第五十八條 其軍人属スル所ノ隊ヨリ離レテ遠方ニ在ル者ハ鎮臺ノ司令將官ノ命ニテ其近隣ノ隊ニテ其願書ノ扱ヒヲナサシムヘシ

第五十九條 恩給ノ願文ハ一次ニ服役停年ト傷痍疾病トヲ主意トシテ之ヲ認ムルコトヲ得ス其軍人停年ノ恩給ヲ受ル權利ヲ有シ同時ニ傷痍疾病ノ恩給ヲ願ハント欲スル者ニハ先ツ其願文何レノ式ヲ

用ユヘキヤヲ問ヒ而ソノ自ラ撰フ所ニ應スヘシ

第六十條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期十五年以上ニ至リ病氣ニテ三年來非職ニ在リ現役ニ復ス可ラサルカ爲ニ退職ヲ許サル、者ハ初メニ查問會議ニ於テ之ヲ檢査シ會議ノ商評之ヲ應當ナリト決スル時ハ直チニ退職ノ進達帖ヲ作ラシム此進達帖會議ノ口供書ト共ニ陸軍卿ニ達スル時ハ卿之ヲ處分シ該官ヲシテ退職ニ因テ罷役後恩給ヲ受ルコトヲ得セシム

第六十一條 停年ニ就テ恩給ヲ仰クノ權アル軍人登時事故アリテ服役ヨリ引去リタル者ハ其願書ヲ要用ノ書類(服役ノ明細書並ニ身元履歷書)ト共ニ取揃ヘテ其軍管ノ鎮臺ノ司契課ニ致スヘシ司契課ニテ之ヲ檢査シ書類ニ檢印署名シ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈スヘ

服役ニ在  
ラサル軍  
人特別ノ  
處置



第六十二條 其軍人傷痍疾病ノ爲ニ増給ヲ請フ者ハ左ノ方法ニ從フヘシ

若其傷痍疾病ニ因テ既ニ恩給ヲ受ルノ後引續キ重症ニ趨キ一肢ヲ失フニ至ラシメタル時ハ當該軍人其恩給ニ就テ更ニ増算スルヲ得ヘシ

又第一號休暇ヲ得テ罷役ニ入りタル後其傷痍疾病以來引續キ重症ニ至リタル軍人上ト同一ノ事情アルニ臨ンテハ恩給ヲ仰クコトヲ得ヘシ但シ前ノ第九條ニ揭示スル所ノ症候アル者ニ限ルヘシ

凡テ如此キ軍人ノ情願ハ其現役ヲ離レシ日ヨリ算シテ一年內ナレハ之ヲ達スルコトヲ得ヘシ然レモ其傷痍疾病一肢ノ切斷ヲ促シ或

ハ兩眼ヲ盲スルニ至リタル者ニハ延イテ三ケ年內ニ至ルヘシ

第六十三條 其願書ハ鎮臺ノ司契課ヘ致シ其保証ノ書類ヲ副フヘシ其書類ハ

第一 當該軍人服役ヲ離レシ時其傷痍疾病ハ例規ニ準シ查覈ヲ受ケタルヲ証スル諸公文

第二 現役ヲ退キタルヲ証スル休暇免狀並ニ諸公文

第三 軍醫ノ診察口供書並ニ診斷証書 是ハ軍人市井ノ籍ニ復セ

シ以來其療用ヲ受ケタル軍醫ヨリ其傷痍疾病引續キ重症ニ變シタルヲ以テ退職恩給若クハ計算増加ヲ願フニ至ルヲ証スル者

但シ軍醫ナキ地方ニ於テハ市井ノ醫員執七一人外二人ニテ診斷シ府縣廳ノ役員立會ノ上証書ヲ認メ役員與印シテ所管鎮臺ノ司



契課ニ致スヘシ

第六十四條 司契課ニテ之ヲ受ケタル時其日附ヲ檢シ期限内ニ在レハ鎮臺ノ司令將官ニ呈シ將官一覽ノ後再ヒ司契課ニ下シ前時ノ書類ト照査シ前時ノ軍醫正ヲシテ其口供書ニ就テ之ヲ檢實セシメ非違ナキ時ハ將官ヨリ前時ノ隊若クハ近傍ノ會計會議ニ下シテ第二十四條並ニ第四十九條以下ノ例ニ從ハシム

司契課ニテ之ヲ受ケタル時其日附ヲ檢シ若期限外ニ在レハ之ヲ還付ス然レモ司契故ナク之ヲ收受セサル時ハ當該ノ軍人直チニ司令將官ニ歎訴スルヲ得

第六十五條 寡婦扶助料其夫ノ傷痍ニ基ツク者ハ其傷痍ヲ受ケタル事故ト傷痍ノ質トノ照査ニ供スヘキモノアルヲ主トスルヲ前條軍

寡婦孤兒ニ就テ特別ノ處置

人ノ傷痍ニ就テ揭示スル所ノ如シ而シテ之ヲ証スル者ハ軍醫若クハ市井醫員ノ公文証書ニシテ其文中ニ當該ノ患者竟ニ其傷痍ニ由テ死ニ至リシヲ陳述スヘシ

若其死沒一旦傷痍平復ノ後ナルハ其寡婦第十三條第三款ニ揭示スル處置ヲ仰クコトヲ得ス故ニ其死去戰地ノ事故ニ源因スル時ハ其證據ニ供スヘキ公ケノ報告若クハ其事故ヲ確証スル公文若クハ陸軍官憲ノ証書若クハ其官憲ノ報告或ハ查問會議ノ書類等ノ内其一ヲ以テ保証ニ供シ且上ニ舉ケタル醫員ノ証書ニテ其事故直チニ當該軍人死沒ノ源因タルヲ明証スヘシ

此兩証ヲ有スレハ其寡婦其夫ノ死去ノ日其住スル區ノ戸長ニ報スル死去ノ証書中ノ日附ヨリ六ヶ月以内ニ其願書ヲ呈スルヲ許ス



第六十六條 其死没ノ源因疫癘傳染ニ係ル者ハ其証據ニ供ス可キ者  
左ノ如シ

第一 府縣若クハ陸軍官憲ノ証書 是ハ其軍人死去ノ節其死去セ  
シ地方ニ於テ其疫疾流行セシコトヲ証スル者

第二 陸軍官憲ノ証書 是ハ當該軍人ノ死没其服役中ニ在テ疫疾  
ニ罹リタルヲ證スル者

第三 醫員合式ノ証書 是ハ當該軍人死去セシ病院ノ院長軍醫若  
クハ此患者ノ執ヒタリシ陸軍若クハ市井ノ醫員ノ診斷書ナリ若  
軍醫ノ診斷書ヲ得ヘカラサル時ニハ其地方ノ府縣若クハ陸軍ノ  
官憲ヨリ遣ハシタル檢官ノ証書ヲ附スヘシ

第六十七條 疫癘傳染ニ由テ死没ニ至リシ軍人戰地若クハ公務ノ外

ニ於テシ又戰地ニテ之ヲ受タルモ一旦平復ノ後ナルキハ此例ニ在  
ラヌ

第六十八條 凡テ寡婦ヨリ出願スルニ就テ証據ニ供スヘキ件々ハ當  
該軍人ノ孤兒第十六條ノ例規ニ準シ其母ニ代ハル時モ亦異ナルコ  
トナシ

願出ノ地  
方

第六十九條 寡婦孤兒扶助料ノ願書ハ居住地ノ府縣廳ヨリ外國ニ在  
ル者ハ外務省ヨリ北海道ニ在ル者ハ開拓使ヨリ内務省ニ移シ内務  
省ヨリ陸軍省ニ照會シ陸軍省ヨリ當該軍人本属ノ鎮臺ニ下シ查覈  
ノ上再ヒ陸軍卿ニ呈シ卿之ヲ正院ニ移スコ第七十六條ノ如シ  
第七十條 其願書ハ寡婦ノ扶助料テレハ寡婦ノ主名ニテ親族若クハ  
其郷里ノ戸主二名証人ニ立テ連名タルヘク孤兒ノ扶助料テレハ後



見人一名又ハ親族若クハ其郷里ノ戸主ニ名証人ニ立テ連名タルハク而シテ區戸長之ニ奥印スヘシ

第七十一條 寡婦扶助料夫ノ傷痍疾病ニ基ツク者ハ第六十五條若クハ第六十六條ノ証書ノ外夫ノ服役明細書婚姻届書ト並ニ男女子アレハ其年齡書ヲ副フヘシ若シ男女子年齡書ニテ其配合ヨリ生レタルコトヲ証シ戸長ノ奥印アレハ婚姻届書ニ及ハス

第七十二條 停年恩給ニ基ツク寡婦ノ扶助料願書ニハ其夫ノ服役明細書男女子年齡書其夫ニ政府ヨリ給シタル恩給番號登錄寫帖即チ恩給証書ヲ副フヘシ

第七十三條 其遺孤母ナク直チニ父ノ傷痍疾病ニ基ツク恩給ヲ受ル者ハ婚姻届書ヲ除キ母ノ死去若クハ離縁ヲ届ケシ証ヲ出スノ外第

退職恩給ノ計算

七十一條ノ例ニ異ナルコトナシ其母死去ノ後恩給ヲ繼クノ孤兒ハ恩給番號登錄寫帖即チ恩給証書ヲ副フヘシ

第七十四條 下士兵卒並ニ同等ノ輩退職恩給ヲ獲ルノ權ヲ得タル者ハ其免役ノ時ニ當リ其恩給許可ノ命下ルマテ其隊ニ駐マルヘシ然レモ直チニ歸郷ヲ願フ者ハ亦自在タルヘシ但シ其歸郷ヲ願フ者ハ發程ノ日ヨリ除隊スヘシ

右ノ除隊ニ屬シタル者ハ發程ノ日ヨリ陸軍定額内ヨリハ旅費ノ外一切之ヲ給スルコトナシ

其傷痍疾病ニ基ツキ退職ヲ許ス者ハ其所屬ノ隊ニ止マリ計算進達ノ日ヲ待ツヘシ

第七十五條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ



輩服役停年ニ由テ退職ヲ願ヒタル者ハ其進達帖陸軍卿ノ受領ヲ歴タルノ報ヲ得ルノ後ニアラサレハ其所屬ノ隊ヲ離ル、コトヲ得ス然レモ其情願ナレハ檢閱使直チニ俸給ノ半額ヲ給シテ之ニ六ヶ月ノ休暇ヲ給フコトヲ得而シテ已ムヲ得サルノ事故アリテ其鎮臺ノ司令將官並ニ其隊ノ首長之ヲ保証スルモハ更ニ休暇ノ願ヒヲ許シ猶六ヶ月ノ休暇ヲ給フヲ得ヘシ但シ休暇間ノ月日ハ計算ノ時之ヲ除ク

第七十六條 凡ソ計算ハ陸軍卿之ヲ主任シ合式ノ恩給計算書ヲ作り之ヲ正院ニ移ス

其傷痍疾病ノ恩給ニ係ル者ハ預メ其証憑書類ト共ニ陸軍軍醫總監ノ會議ニ付シ而シテ後ニ之ヲ計算ス

正院ニテハ計算書ヲ大藏卿ニ移シ點檢ヲ歷テ再ヒ正院ニ移シ正院ヨリ恩給許可ノ令ヲ内務陸軍兩卿ニ移シ其所轄ヲ歷テ當該人名ニ下サシム

第七十七條 停年恩給ハ之ヲ受ル軍人ノ官階ニ準スルヲ例トス然レ

モ其官階ニ進ミ現役ニ服スル未ダ進級條例ノ停年最下限ノ半ニ至ラサル前ニ退職ヲ願フ者ハ前官ニ準シテ之ヲ賜フヲ例トス

第七十八條 凡テ上長官士官准士官下士並ニ同等ノ諸官其官階ニテ現役ニ服スルコト十二年滿限（上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ非職ヲモ算ス）ノ者ニハ其官階ニ屬スル恩給五分ノ一ヲ以テ之ヲ増スコトヲ得

此特別ノ例ニ係ル恩典ハ或ハ停年ニ由リ或ハ傷痍疾病ニ由リテ表



中最上限ノ權ヲ有スル者モ亦是ニ與カルコトヲ得

第七十九條 恩給計算ヲナスニ當リ其軍人前官ニテハ十二年滿限ニ當リ五分一ノ増加ヲ得ルヲ以テ其増加ノ額現在ノ官階ニテ算スルヨリモ較上ル者ハ前官ニ準シテ之ヲ算スルコトヲ得

第八十條 毎年政府會計ノ期ニ於テ從來各種ノ恩給ニ就テ其年ノ通計ヲ以テ來年ノ多寡ヲ量リ大藏卿ヨリ正院ニ上申シ決議ノ上太政大臣ヨリ大藏陸軍兩卿ニ之ヲ下付ス

第八十一條 凡ソ恩給扶助料受領ノ者ハ内務省ヨリ其居住地ノ府縣廳ヲ歷テ其恩給登錄寫帖即チ恩給証書ヲ受領シ是ニ據テ年々府縣廳ヨリ金圓支給ヲ仰クヲ得

其當該人名恩給証書ヲ受領スルノ前ニ陸軍卿ヨリ計算ノ告示ヲ該

罷役後恩給

名ニ下シ其中ニ計算ヲ立ル本則ト之ニ屬スル諸事ヲ告示ス

第八十二條 罷役後恩給ハ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩罷役ニ入ルノ初メ服役實期十五年滿限ノ者ニ非レハ之ヲ受ルコトヲ得ス

其給額ハ當該上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩官階ニ準スル恩給ノ最下限ノ給額三十分ノ一ヲ以テ服役實期ノ年數ニ乘シテ給ス但シ罷役後恩給ハ從軍年並ニ十二年停年ヲ算入スルノ恩典ナシ

第八十三條 罷役後恩給ハ當該軍人ノ生涯ニ止リ變シテ寡孤扶助料トナルコトナシ

第八十四條 軍人疾病不治ノ症ニ因テ罷役ヲ願フ者ハ其願書疾病ノ



爲メノ退職願ノ如ク之ヲ扱フヘシ  
其不治タルヲ証スル爲ニ診斷ヲナス醫官ハ鎮臺司令將官ヨリ之ヲ命ス

其診斷不治ト決スル者ハ會計會議ニ付シ爾後ハ第五十三條以下ノ諸條ニ開列スル所ノ方法ニ準スヘシ

第八十五條 其上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩軍紀ヲ犯シ懲治ノ爲ニ罷役ニ入ル者恩給ヲ賜フノ例ニ在ラス  
第八十六條 恩給ヲ受クルノ始期ハ左ノ如シ

第一 計算ノ告示ノ日ヨリ之ヲ給ス即チ陸軍ノ簿籍中該名ヲ除クノ日ナリ

第二 計算告示ノ日既ニ休暇ニ在ル上長官士官准士官並ニ會計軍

恩給ノ支  
給並ニ請  
求

醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ニハ許可ノ令下ル日ヨリ之ヲ給ス其隊ヨリ發程シタル何ノ日ニ在ルヲ論セス

若當該上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩  
休暇ノ俸ヲ受ケタルモノハ恩給ヲ受ルノ日ヲ限リ休暇俸ノ餘金  
ハ陸軍省へ返納ス

第三 下士以下モ亦前條ニ同シ其休暇俸ハ之ヲ願フノ權利ナシ

第四 當該軍人死去シタルハ家族扶助料ハ其死去ノ翌日ヨリ給ス

第八十七條 凡テ恩給並ニ扶助料ヲ受クルノ始期ハ陸軍省ヨリ内務

省へ通報シ四季ノ首月毎ニ前三箇月分其府縣廳ヨリ金額ヲ支給ス

第八十八條 金額ヲ受領スル者ハ當該人名ニテモ代人ニテモ登錄寫

帖ノ証書ヲ持參シ支給人披見ノ上其區戶長ヨリ出セル本人存生ノ



証書並ニ金額受領証書ト引替ニテ之ヲ交付スヘシ但シ外國ニ在留セル其本人存生ノ証書ハ日本ノ公使若クハ領事官ヨリ差出スヘシ

第八十九條 若シ金額ヲ受ル當該人名前三ヶ月以來死去シタル時ハ支給人戸長ヨリ出セル死去ノ証書ニ對シ日割一ヶ月三十日トスヲ以テ其金額ヲ給シ受領証書ヲ取り其權利消絶ニ屬シテ移轉ナキ者ハ其登録寫帖ノ証書ヲ收メ府縣廳ヨリ内務省ニ還付シ而シテ陸軍省ニ報告スヘシ

第九十條 其權利未タ消絶セスシテ移轉ニ屬スル者ハ登録寫帖ヲ還ヘシ其寡婦若クハ孤兒扶助料願出ノ証トナサシム

第九十一條 恩給番號登録寫帖ノ証書ハ其裏面ニ四首月ノ金額ヲ記シタル者ナリ若恩給ヲ受ルノ人其證書ヲ盜難水火災等ニテ失亡ス

ル時ハ速カニ届ケ出ヘシ然ル時ハ猶第二寫帖ヲ受ルコトヲ得ヘシト雖モ第二寫帖ヲモ失亡スル時ハ最早之ヲ受ルコトヲ得ス其恩給ハ唯生存ノ証書ノミニ就テ之ヲ給スベシ

第九十二條 若陸軍恩給ヲ受ルノ人其本管即チ証書中記載ノ地ナラスシテ他府縣ニ就テ金額ヲ受領セント欲スル者ハ此事ニ就テ其府縣廳ヲ歷テ出願スヘシ

右願書ハ四首月ノ一日ヨリ二箇月前ニ出スヘシ此期限ヨリ遲延ニ及ヘハ從前ノ府縣廳ニ就テナラテハ之ヲ受領スルコトヲ得ス

第九十三條 日本外ノ地ニ寄留ノ許可ヲ願フハ地方官憲ノ手ヲ歷テ内務卿ニ願フヘシ其願意至當ナレハ内務卿ノ處決ニ因テ恩給若クハ扶助料一箇年分ノ前借ヲ許スヘシ



第九十四條 前四條ニ揭示セル所ニ拘ラス恩給並ニ年々ノ扶助料ハ一ケ年ノ間棄置キ請求セサル時ハ大藏省ノ恩給簿ヨリ之ヲ削リ去リ再ヒ請求スト雖モ前時ノ金額ヲ得ルノ權ナシ

又寡婦孤兒等當該軍人ノ死去ノ日ヨリ一箇年ノ間其事狀ヲ審カニシテ願出サル者ハ其權利消絶ニ屬ス

第九十五條 陸軍恩給ノ計算金額ニ就テ違算ノ廉アリト思フ時ハ初メテ金額ヲ受領セシ日ヨリ三ケ月以内ニ之ヲ願出ルヲ得ヘシ但シ萬一粗漏ニ屬スル時ハ其權利消絶スヘシ

右ノ請求ハ地方所管鎮臺司契課ノ手ヲ歴テ陸軍卿ニ願フヘシ

第九十六條 凡ソ恩給ヲ仰ク者故ヲニ年月ヲ算スルコト實ナラス或ハ傷痍疾病ニ托シ或ハ寡孤ナリト偽ハル等上告實ヲ以テセサル者

ハ國成典アリ其發覺該官致仕ノ前ニ在レハ軍法ニ處シ致仕ノ後ニ在リ若クハ其他ノ者ニ係レハ常律ニ處スヘシ



陸軍罷役俸並恤金令



罷役俸

陸軍罷役俸並恤金令

第一條 凡ソ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役期年滿十二年ノ者ニ非レハ罷役ニ就クト雖モ絶テ俸給ヲ得ルノ權ナシ

第二條 凡ソ罷役ニ入ル上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役期年滿十一年ニ至リ未タ十五年滿限ニ至ラサル者ハ其就役年間ノ半ニ均シキ年間罷役俸ヲ受ルヲ得此罷役俸ハ其官階ニ準スル退職恩給ノ最下限三分ノ二ニ均シトス

第三條 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩罷役俸ヲ受ルノ權利ハ陸軍卿ノ確定セル計算ニ基ツキ正院ニテ之ヲ覆勘ス其方法凡テ退職恩給ノ例ノ如シ



第四條 計算ノ本則ハ亦陸軍卿ヨリ公券ヲ以テ當該ノ人名ニ知告シ其服役實期ノ委曲並ニ罷役俸ヲ受ル權利ヲ有スルノ月ヲ開示ス此公券ハ支給許可ノ証書ト共ニ當該軍人ノ居住スル地方所管鎮臺ノ司契課ニ下シ司契課ノ官人署名檢印ノ上ニテ府縣駐在曹長ヲ媒シ當該軍人ニ下附ス

第五條 計算請求ノ權並ニ權利停止ノ項ハ恩給令ノ第九十四條並ニ第四條ニ異ナルコトナシ

第六條 罷役俸ノ支給ハ四首月ニ於テ前三ヶ月分該管鎮臺ノ司契課ヨリ府縣駐在曹長ヘ移シ當該人名ニ交付シ受領証書ヲ出サシム其受領証書ニハ生存ヲ証スル爲ニ戸長ノ奥印ヲ受テ出サシム

第七條 凡ソ罷役俸ヲ受ルモノハ府縣駐在曹長ノ請ニ應シ其度毎ニ

公券ヲ出シ示スヘシ

第八條 若當該ノ軍人先期內ニ死去シタル時ハ駐在曹長ニテ其金圓ヲ交付セス死去ノ月日ヲ審カニシ鎮臺司契課ニ報シ日數ニ準シ殘餘ノ金圓ヲ受テ之ヲ當該軍人ノ嗣子若クハ親族ニ交付シ其公券ヲ取テ司契課ニ還付スヘシ

總テ此手數ヲ省ク爲ニ罷役俸ヲ受ルノ軍人死去ノ度毎ニ月日ヲ審カニシ府縣駐在曹長ヲ媒シ當該ノ司契課ニ報告スルヲ要ス其定期盡ル者ハ最後ノ金額ヲ交受スル時公券ヲ還付シテ皆濟ヲ証スヘシ

第九條 罷役俸ヲ受クルノ軍人居住ヲ移シ他ノ管廳ニテ兌換票ヲ交授セント欲セハ其旨ヲ以テ四首月一日ヨリ二ヶ月前ニ當該ノ司契



課ニ願書ヲ呈スヘシ但シ移住地並ニ其移住ノ月日ヲ審カニスヘシ

第十條 罷役俸ハ一週年棄置キ請求セサル時ハ之ヲ其權利消絶セシ  
モノトシテ司契課ノ簿籍ヨリ其名ヲ除ク

第十一條 凡ソ下士卒並ニ同等ノ輩陸軍ニ奉仕シ疾病ヲ受ケ若ク  
ハ公務中傷癘ヲ受ケテ罷役ニ入り傷癘疾病ヲ受ケタル故ヲ以テ扶  
助ヲ仰クヲ要スル者服役實期滿九年ノ後ナレハ罷役恤金ト名ケタ  
ル恩典ニ與カルコトヲ得此恤金ハ二季ニ分テ月頭ニ支給スルモノ  
ナリ

第十二條 下士卒並同等ノ輩服役中受ケタル傷癘疾病ニ由テ第二  
號ノ休暇ヲ與ヘ罷役ニ入りタル者ハ此給料ヲ願フコトヲ得

第十三條 此恤金ヲ受ル者ハ他ノ職役ニ就クカ又ハ他ノ營業ヲ爲ス

カ或ハ本人不行跡若クハ粗暴ノ失錯アレハ陸軍卿此恤金ヲ停止ス  
ルコトヲ得

此故ニ鎮臺ノ將官ハ府縣ノ官憲ニ依頼シ時々報告ヲ取り之ヲ陸軍  
卿ニ呈ス

第十四條 此恤金ハ其實一身ノ口ヲ糊スルヲ目的トスルヲ以テ若當  
該ノ罷役軍人死シテ之ヲ埋葬スルニ其家費ヲ盡スノ急乏ニ逢ヘハ  
陸軍官憲ノ願ニ依テ陸軍卿其家族ニ一期六ヶ月分ノ金額ヲ給與ス  
ルコトヲ得

第十五條 總テ軍人罷役ニ入り又ハ唯服役ヲ免シタル者ハ登時之ヲ  
願フノ志趣ナシト雖後日若シ此恩典ヲ願ハント欲スル者ノ爲ニ一  
箇年ノ猶豫ヲ假ス其一旦此恩典ヲ受ケタル後再ヒ之ヲ願ハント欲



スル者モ同シシ此猶豫ヲ假スヘシ

第十六條 此恩典ヲ請フノ進達書ハ其人ニ就テ其隊ノ長官之ヲ作り其内ニ必ス當該軍人退居セント欲スル地名ヲ開列スヘシ而シテ之ニ副フヘキ書類左ノ如シ

第一 軍醫診斷証書 是第一診斷並ニ覆覈診斷ヲ兼ル者ニシテ其傷痍疾病ノ罷役ニ至ラシメタル景況ヲ精確仔細ニ記述スル者ナリ

第二 其傷痍疾病ノ原因証書 是病因ヲ詳カニスル者ニシテ若其病因明確ニ証スヘカラサル時ハ其軍人發病ノ時ノ景況ヲ叙シ病症ニ就テ臆斷ノ原因ヲ書スヘシ

第三 其軍人ノ服役並人相ノ記載書並ニ身元明細書ヲ添フヘシ

第十七條 當該軍人ハ該隊中ニ在テ進達ニ就テノ處決ノ來ルヲ待ツヘシ但シ直チニ歸郷ヲ願フ者ハ其意ニ任ス

第十八條 其隊ノ長官ハ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈シ司令將官ハ之ヲ陸軍卿ニ移シ卿又之ヲ陸軍軍醫總監ノ會議ニ付シテ其覆檢ヲ歴ルノ後陸軍卿其年々ノ金額ト之ヲ受ルノ始期トヲ定ム

第十九條 凡此恩典ヲ受タル軍人ハ其姓名ヲ書シタル券狀ヲ受ク是ハ唯ニケ年間ノ價直ヲ有スル者ニシテ之ニ陸軍省ニ在ル恩金本帳ニ登錄シタル番號ヲ附ス

第二十條 其軍人此券狀ヲ受ケテ罷役ニ入りタル時ハ直チニ軍隊ノ簿籍ヨリ其名ヲ除キ其居住ノ地ヘ向ケ發程セシム其郷里ニ至ルニ及ヒ自ラ此券狀ト並ニ罷役休暇ヲ受ケタルトヲ其管廳並區戸長ニ

許可ノ法



報スヘシ

第二十一條 恩金受領ノ始期ハ其券狀ヲ受ケタル日ヨリ始ムルヲ例トス然レモ其隊中若クハ陸軍病院ニ在テ發程遲延ニ及ヒタル日數ハ之ヲ申告シテ陸軍卿ノ處決ニ任スヘシ

第二十二條 其支給受領證書ノ方法ハ第六條以下ニ揭示シタル罷役給ニ異ナルコトナシ唯當該軍人死去シタルモハ券狀ヲ府縣駐在曹長ニ還付スルノ外計算還納ヲ要スルコトナシ

第二十三條 其居住ヲ移ス者ハ亦第九條ノ方法ニ準ス若其手續ヲ歴スシテ移住スル者ニハ再ヒ給與スルコトナシ

第二十四條 二箇年恩金ヲ受ケタル後ハ再ヒ後二ケ年ノ恩金ヲ給セス然レモ之カ爲ニ例年春秋兩度其管ノ鎮臺ヨリ特別ノ委員ヲ派出

シテ當該ノ軍人ヲ覆檢セシムルヲ以テ此委員猶本人ノ本復ニ至ラサルヲ證明スル時ハ更ニ二年ノ恩金券狀ヲ受クルコトヲ得

第二十五條 右委員巡廻ノ節其診斷ヲ受ケサル者ハ恩金ヲ停止スヘシ

此委員診斷ノ節本復ニ趨クヲ以テ一旦券狀ヲ繳納スト雖モ其後疾病再發スルモハ更ニ之ヲ願フコトヲ得ヘシ

其再發委員巡廻ノ前ナルモハ巡廻ヲ待テ之ヲ願ヒ若其期遠キモハ府縣駐在曹長ニ就テ其查覈ヲ受テ之ヲ願ヒ猶事宜ヲ得サル者ハ管廳ノ証書醫員ノ証書ヲ以テ之ヲ願フヘシ

第二十六條 當該ノ軍人其傷痍疾病重症ニ趨キ恩給ヲ給スヘキニ係ル者ハ更メテ恩給ヲ賜フ



罷役恩金ノ券狀ニテ受領シタル金額ハ恩給受領ノ日ヨリ返納スヘシ

廢疾人ニ就テ特別ノ處置

第二十七條 凡テ軍人服役中ノ疾病(公務ノ故ニ非ルモノ)ニ由テ一肢以上ノ切斷ヲ受ケ若クハ兩目ヲ盲スト雖モ恩給ヲ受ルノ權利ナキ者ハ服役實期滿九年ニ至ラスト雖モ四季ノ扶助金ヲ給スルユトアリ  
其願書進達ハ上ニ揭示スル如ク証書ヲ副フヘシ如此キ軍人ハ隊中ニ在リテ恩金ノ券狀ヲ待タヌ直ニ該隊ノ簿籍中ヲ除キ其郷里ニ向ケテ發程セシムヘシ  
其郷里ニ於テ之ニ許可セル特別扶助金ノ第一額ヲ支給スル爲ニ下令ノ寫帖ヲ受クヘシ

將官退職令



將官退職令

第一條 凡ソ將官ハ多年經久ノ疾病ニ因テ非職ヲモ辭スル者ニ非レハ退職ヲ命スルコトナシ

第二條 然レモ中將少將并ニ會計監督長軍醫總監ハ年齡ニ因テ後備軍ノ驅員ニ轉スヘシ

第三條 其年齡ハ中將ハ六十二少將并ニ其相當ノ官ハ六十ヲ以テ定限トス

第四條 凡ソ後備軍ノ驅員ニ備ハル將官ハ戰時國內ノ司令ニ非レハ現役ニ服スルコトナシ

第五條 首帥若クハ偏裨ノ司令ニ任シ曾テ戰地ニ臨ミタル將官ハ後備軍ノ驅員ニ備ハル例ニアラスト雖モ其年齡六十五ニ至レハ亦是



ニ轉ス但元老院議官ニ列シ或ハ他ノ兼官ニ任スル者ハ此限ニアラ  
ス

第六條 凡ソ將官後備軍ノ軀員ニ轉スルニ當リ退職ヲ請フ者ハ恩給  
ヲ賜フテ之ヲ許ス

陸軍恩給令附錄



陸軍恩給令附録

第一條 陸軍軍人恩給ヲ受ルノ權理ハ本令ニ掲載スルノ外コレナシ  
ト雖モ戰死或ハ公務ニ因テ死亡スル者父母或ハ幼少ノ弟妹ノミ在  
テ之ヲ養育スル親戚モナク飢渴ニ及フヘキモノ其府縣廳等所管ニ  
於テ查覈ノ上恩給令第六十九條ノ順序ヲ歴テ申告スルコトアラハ其  
次第柄ニ因リ臨時ノ詮議ヲ以テ相當ノ扶助料ヲ給スルコトアルヘシ  
但寡婦孤兒ノ内ニ扶助料ヲ受ルモノアルトキハ別ニ之ヲ給スル  
コトナシ

第二條 軍屬ハ恩給ヲ受ルノ權理ナシト雖モ戰地或ハ公務ニ因テ傷  
疾ヲ受ケ又ハ死亡スルモ其原由ニ因リ臨時ノ詮議ヲ以テ相當ノ  
扶助料ヲ給スルコトアルヘシ



第三條 軍人停年未滿ニシテ恩給並罷役俸罷役恤金ヲ受ケサル者ハ  
當分從前ノ如ク文官一般ノ滿年賜金ヲ給ス但罷役俸罷役恤金ヲ受  
ルモノト雖モ滿年賜金ト比較シ其金高ノ多キ方ニ就テ給スヘシ

第四條 恩給並ニ罷役俸罷役恤金ヲ受ルモノト雖モ其軍人ノ籍ニ列  
セサルノ前文官ニ奉仕スル者ハ其年數ニ應シ滿年賜金ハ別ニ給ス  
ヘシ

第五條 本令發行ノ日ヨリ傷痍扶助及ヒ死亡ノ者祭筵家族扶助概則  
ハ廢止ニ屬スト雖モ發行以前傷痍死亡ニ因リ既ニ扶助ヲ受ルモノ  
ハ從前ノ規則ニ從フヘシ



陸軍武官恩給并扶助料

諸 率	官 等													服役停年ニ就テノ恩給
	一 等	二 等	三 等	四 等	五 等	六 等	七 等	八 等	九 等	十 等	十 一 等	十 二 等	十 三 等	
	千六百圓	千四百圓	千圓	八百圓	六百七拾五圓	五百圓	三百七拾三圓	貳百六拾七圓	貳百拾四圓	百七拾壹圓	七拾九圓	七拾四圓	六拾壹圓	五拾五圓
	千貳百圓	千〇五拾圓	七百五拾圓	六百圓	五百〇六圓	三百七拾五圓	貳百八拾圓	貳百圓	百六拾圓	百貳拾八圓	六拾三圓	六拾圓	四拾九圓	四拾五圓
	貳拾圓	拾七圓五拾錢	拾貳圓五拾錢	拾圓	八圓四拾五錢	六圓貳拾五錢	四圓六拾五錢	三圓三拾五錢	貳圓七拾錢	貳圓拾五錢	八拾錢	七拾錢	六拾錢	五拾錢
	千九百貳拾圓	千六百八拾圓	千貳百圓	九百六拾圓	八百拾圓	六百圓	四百拾八圓	三百貳拾圓	貳百五拾七圓	貳百〇五圓	百〇三圓	九拾六圓	七拾九圓	七拾貳圓
	千六百圓	千四百圓	千圓	八百圓	六百七拾五圓	五百圓	三百七拾三圓	貳百六拾七圓	貳百拾四圓	百七拾壹圓	七拾九圓	七拾四圓	六拾壹圓	五拾五圓
	千〇五拾圓	七百五拾圓	六百圓	五百〇六圓	三百七拾五圓	貳百八拾圓	貳百圓	百六拾圓	百貳拾八圓	六拾三圓	六拾圓	四拾九圓	四拾五圓	三拾五圓
	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者	三項ニ出 ハ一層 ニシテ 用辨ニ キ者

服役停年ニ就テノ恩給

傷疾疾病ニ就テノ恩給

二十五年以上ノ服役各年及ヒ戰役ノ計算ヨリ生スル各年ニ當テノ増率

一 項 盲目或ハ二肢ヲ亡スル者  
二 項 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失フ者  
三 項 一肢ノ用ヲ失フ或ハ之ヲ失ハスニ等シキ傷疾疾病但同上  
四 項 三項ニ出ハ一層ニシテ用辨ニキ者

短ヲ不論 但同上

朱書ハ服役各年ニ對シ此員數ヲ増率ス尤最上ノ高ヲ超ルコトナシ



ノ恩給

三項	四項	甲	乙	罷役後恩給	罷役俸	罷役恤金
<p>肢ノ用ヲ失 或ハ之ヲ失 スレ之ニ等 キ傷疾疾病 但同上 不書ハ服役各 キニ對シ此員 ヲ増率ス尤 取上限ノ高ヲ 起ルコトナシ</p>	<p>三項ニ比スレ ハ一層輕キ者 ニシテ自己ノ 用辨ニ差支ナ キ者</p>	<p>戰地或ハ公務 ニ因テ死シタ ル軍人ノ寡婦 孤子</p>	<p>服役停年ニ因 テ恩給ヲ受ケ 或ハ受クヘキ 權ヲ有シテ死 シクル軍人ノ 寡婦孤子</p>	<p>服役十五年以 上ノ者服役實 期ノ年數ニ乘 ス</p>	<p>服役十一年以 上十五年未滿 ノ者就役年間 ノ半ニ等シキ 年間ニ給ス</p>	<p>公務中傷疾ヲ 受ケ一等休暇 ヲ得扶助ヲ仰 ク者ニ給ス 但滿九年以 上ノ者</p>
<p>貳百圓</p>	<p>八百圓</p>	<p>八百圓</p>	<p>四百圓</p>	<p>貳拾圓</p>	<p>四百圓</p>	<p>四百圓</p>
<p>〇五拾圓</p>	<p>七百圓</p>	<p>七百圓</p>	<p>三百五拾圓</p>	<p>拾八圓八拾七錢</p>	<p>三百三拾七圓</p>	<p>三百三拾圓</p>
<p>百五拾圓</p>	<p>五百圓</p>	<p>五百圓</p>	<p>貳百五拾圓</p>	<p>拾貳圓五拾錢</p>	<p>貳百五拾圓</p>	<p>貳百五拾圓</p>
<p>百圓</p>	<p>四百圓</p>	<p>四百圓</p>	<p>貳百圓</p>	<p>九圓三拾三錢</p>	<p>百八拾七圓</p>	<p>百八拾七圓</p>
<p>百〇六圓</p>	<p>三百二拾八圓</p>	<p>三百二拾八圓</p>	<p>百六拾九圓</p>	<p>拾六圓八拾七錢</p>	<p>三百三拾七圓</p>	<p>三百三拾七圓</p>
<p>百七拾五圓</p>	<p>貳百五拾圓</p>	<p>貳百五拾圓</p>	<p>百貳拾五圓</p>	<p>九圓三拾三錢</p>	<p>百八拾七圓</p>	<p>百八拾七圓</p>
<p>百八拾圓</p>	<p>百八拾七圓</p>	<p>百八拾七圓</p>	<p>九拾三圓</p>	<p>六圓六拾七錢</p>	<p>百三拾三圓</p>	<p>百三拾三圓</p>
<p>百圓</p>	<p>百三拾四圓</p>	<p>百三拾四圓</p>	<p>六拾七圓</p>	<p>五圓三拾三錢</p>	<p>百〇七圓</p>	<p>百〇七圓</p>
<p>百六拾圓</p>	<p>八拾六圓</p>	<p>八拾六圓</p>	<p>四拾三圓</p>	<p>四圓貳拾七錢</p>	<p>八拾五圓</p>	<p>八拾五圓</p>
<p>貳拾八圓</p>	<p>四拾圓</p>	<p>四拾圓</p>	<p>貳拾圓</p>	<p>四圓貳拾七錢</p>	<p>八拾五圓</p>	<p>八拾五圓</p>
<p>拾三圓</p>	<p>三拾七圓</p>	<p>三拾七圓</p>	<p>拾九圓</p>	<p>四圓貳拾七錢</p>	<p>八拾五圓</p>	<p>八拾五圓</p>
<p>拾圓</p>	<p>三拾壹圓</p>	<p>三拾壹圓</p>	<p>拾五圓</p>	<p>四圓貳拾七錢</p>	<p>八拾五圓</p>	<p>八拾五圓</p>
<p>拾九圓</p>	<p>三拾壹圓</p>	<p>三拾壹圓</p>	<p>拾五圓</p>	<p>四圓貳拾七錢</p>	<p>八拾五圓</p>	<p>八拾五圓</p>
<p>拾五圓</p>	<p>貳拾八圓</p>	<p>貳拾八圓</p>	<p>拾四圓</p>	<p>四圓貳拾七錢</p>	<p>八拾五圓</p>	<p>八拾五圓</p>

最下段ノ額ヲ | 最上段ノ額ヲ



第百壹號

府縣

明治七年<sup>十一月</sup>第十四十七號ヲ以テ相達候史誌編輯費本年以降金貳百五拾圓増加候條本月ヨリ月割ヲ以テ大藏省ヨリ可受取此旨相達候事

明治九年十月三十日

太政大臣三條實美



明治八年三月第三拾五號ヲ以テ諸新聞紙官費買入ノ儀廢止候旨相達  
置候處各廳事務上ニ於テ必要ノ分ハ自今定額内ヲ以テ購求候儀ハ  
不苦候條此旨相達候事

明治九年十一月十三日

太政大臣三條實美



第百拾號

使府縣

明治元年六月同六年八月第二百八十二號第二百八十三號布告同七年  
十月第百三十四號達朝鮮國人民漂着ノ節處分規則左ノ通改定候條此  
旨相達候事

但費用ノ内公費ニ可相立分ハ一時豫備金ノ内ヨリ拂出シ追テ明  
細仕譯帳并証書類相添受取方内務省へ申出ヘシ

明治九年十一月十八日

太政大臣三條實美

一朝鮮國人民本邦へ漂着候節其地ヨリ同國釜山港へ便船於有之ハ  
直ニ該港日本人民管理官へ宛送届ヘシ便船アラサル時ハ長崎縣



廳及對州嚴原同縣支廳ノ内へ送致スヘシ同廳ヨリハ釜山港へ發  
スル船ニ托シ送届クヘシ

一 漂民衣服缺乏ノ者ハ時衣一領公費ヲ以テ支給スヘシ

一 漂民滯在中ノ費用及彼國へ送致ノ費用等ハ彼國政府ヨリ一日金  
拾錢ヲ出スヘキ約束相成候ニ付右ヲ目的トシ漂民取扱方成ルヘ  
ク簡易ニ致シ不足ノ分ハ公費タルヘシ

一 漂民健康ナラハ本國へ引渡ス迄ハ成ルヘキ丈ケ工業ニ就カシメ  
相當ノ工錢ヲ付與スヘシ但其工錢ハ右朝鮮政府ヨリ出スヘキ日  
給錢ヲ差引ヘシ

一 溺死及漂着後病没ノ者ハ彼地へ棺送ニ及ハス埋葬シテ其事由ヲ  
外務省内務省へ報知スヘシ

第 百拾壹號

院省使廳府縣

海軍禮砲條例別冊ノ通被定候條此旨相達候事

明治九年 十一月廿二日

太政大臣三條實美



海軍禮砲條例



海軍禮砲條例

第一條

天皇陛下へノ禮砲ノ數ハ二十一發ニシテ之ヲ皇禮砲トス

第二條

天皇陛下禮砲ヲ爲ス可キ堡砦或ハ砲臺有ル地ニ著御發御ノキハ此堡砦砲臺及ヒ其港內在泊ノ諸軍艦ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發ス可シ

第三條

軍艦ニ臨御ノ時ハ其港在泊ノ諸軍艦ニ於テ滿艦飾ヲ爲ス可シ御艇本艦ニ接近スルル其艦ニ於テハ水夫長二員舷側ニ在テ同音ノ號笛ヲ吹キ二員ノ士官或ハ士官補艦梯上下ノ兩側ニ立テ奉迎シ海軍將官又ハ



指揮官及ヒ艦長ハ梯邊ニ奉迎シ其他ノ諸士官ハ官等ニ從テ後艦甲板  
上艦梯ノ側舷ニ整列シ樂隊ハ其對舷ニ整列シ水兵ハ諸桁上ニ整列ス  
其佗ノ諸員ハ前舳ニ整列ス此時副長ノ祝聲ニ應シテ桁上ノ水夫一同  
祝聲ヲ發スルヲ總テ三回ス又本艦ニ連接セル諸艦船ニ於テモ齊ク水  
夫ヲ諸桁上ニ整列セシメ本艦ト同ク祝聲ヲ發ス可シ

#### 第四條

艦内ニ乘御ノ時ハ御旗ヲ大橋頂ニ海軍旗ヲ前橋頂ニ國旗ヲ後橋頂ニ  
掲ク但シ此時本艦ニ將旗ヲ掲ケアレハ之ヲ下ス若シ此三旗ヲ掲ク可  
キ三橋ヲ有セサル艦船ニテハ支橋或ハ旗竿ヲ設立シ此旗ヲ掲ク諸士  
官以下敬禮シ水兵ハ捧銃シ樂隊ハ奏樂シ同時ニ皇禮砲ヲ發ス諸軍艦  
ニ於テモ亦本艦ノ禮砲第二發目ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發シ最後ノ放發ニ

ヲ諸艦船桁上ノ水夫皆甲板上ニ下ル可シ但シ御艇ニハ唯御旗及ヒ國  
旗ヲ掲クルノミ

#### 第五條

軍艦ニ乘御シ航行アル時ハ滿艦飾ハ總テ除キ唯本艦ニ於テ御旗海軍  
旗及ヒ後橋ノ國旗ヲ掲ク然レモ航行中ハ唯御旗ノミヲ掲クルヲアル  
ヘシ

#### 第六條

還幸ノ時モ其禮式前ニ同シ但シ艦梯通御ノ時水夫ヲ桁上ニ列立シ御  
艇ニ乘御アラハ三回祝聲ヲ發セシム御艇ニ御旗ヲ掲クルハ本艦ノ  
御旗ヲ國旗ト交換シ御艇本艦ヲ離ル、ノ後皇禮砲ヲ發ス其他ノ諸軍  
艦ニ於テモ同ク水夫ヲ桁上ニ列立シ三回祝聲ヲ發セシメ本艦ノ禮砲



第二發目ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發ス可シ

第七條

諸艦船ノ近傍ヲ通御ノキハ其艦船ニ於テ艦長副長當直士官及ヒ暗號手ハ遠望臺ニ諸士官ハ後艦ニ整列シテ敬禮ヲナシ樂隊ハ奏樂シ水兵ハ桁上ニ列立シテ三回祝聲ヲ發ス可シ

第八條

乘御ノ端艇ニハ副長少佐或ハ時トシテ大尉一員指揮ヲ司リ少尉楫ヲ管掌ス其敬禮法ハ艦船上ニテハ前數條ノ如シト雖モ諸端艇ニ於テハ楫ヲ建テ總員脫帽直立スルニ止マル

第九條

航御ノ時其艦船ニ御旗海軍旗及ヒ國旗ヲ掲揚スル時ハ之ニ逢フ所ノ

諸軍艦ハ必ス皇禮砲ヲ發ス可シ又其禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺ノ近傍ヲ通御ノ時ハ該堡砦砲臺及ヒ同所ニ在泊ノ軍艦ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發ス可シ

第十條

乘御ノ艦船在泊セル港内ニ來着スル諸軍艦及ヒ御旗ヲ掲ケタル海岸ノ近傍ヲ航行スル諸軍艦ハ必ス皇禮砲ヲ發ス可シ

第十一條

御艦若シ海軍旗國旗ヲ掲ケス唯御旗ノミヲ掲クルキハ諸軍艦及ヒ堡砦砲臺ヨリ皇禮砲ヲ發セサルモノトス但シ軍艦ハ臨時發砲スル事アル可シ

第十二條



太上天皇太皇太后皇后皇太子及ヒ皇太子妃皇太子皇女ニハ  
天皇陛下ト同一ノ敬禮ヲ爲シ皇禮砲ヲ發ス可シ但  
太上天皇太皇太后皇后皇太子及ヒ皇太子妃ニハ御旗ヲ用ヒ皇  
子皇女及親王ニハ皇族旗ヲ用フ可シ

第十三條

皇子皇女艦船ニ乘艦ノ時ハ皇族旗ヲ其艦船ノ大橋頂ニ掲ク可シ但シ  
其式總テ臨幸ノ時ト同ク唯海軍旗ヲ掲ケサルノミ

第十四條

皇族旗ヲ掲ケタル艦船ニ逢フ諸軍艦ハ必ス皇禮砲ヲ發ス可シ

第十五條

御旗及ヒ皇族旗ヲ掲ケタル艦船ハ唯皇禮砲ヲ受ルノミニシテ答砲ヲ

ナスコナシ總テ此旗章ヲ掲揚セル艦船在泊中ハ他ノ諸艦船ハ祝砲ヲ  
交換スルコナシ但シ外國艦船トノ關係ハ此限ニ在ラス

第十六條

御艦外國ノ艦船ヨリ皇禮砲ヲ受クルキハ我カ先任官乗組ミノ一艦ヨ  
リ答砲ス可シ若シ他ニ軍艦ナキハ御艦ヨリ答砲ス可シト雖モ其御  
艦軍艦ニ非レハ答砲セス又内外國ノ艦船同時ニ皇禮砲ヲ發スルキハ  
之ニ答砲スル事ナシ

第十七條

左ニ記載セル祝日ニハ諸艦船總テ滿艦飾ヲ爲シ各軍艦及ヒ堡砦砲臺  
ヨリ正午ニ皇禮砲ヲ發ス可シ

紀元節



天長節

第十八條

左ニ記載セル祭日祝日ニハ諸艦船總テ艦飾ヲ爲ス可シ

一月一日

孝明天皇例祭

第十九條

外國ノ皇帝或ハ太子及ヒ其后妃又ハ大統領我カ領内禮砲ヲ爲ス可キ  
堡砦砲臺有ル地ニ到著シ又此地ヨリ退歸スルコアラハ其到著ト退歸  
ノ時トニ於テ其堡砦砲臺ヨリ皇禮砲ヲ發シ又同所碇泊ノ諸軍艦ニテ  
其國旗ヲ大櫓頂ニ掲ケ滿艦飾ヲ爲ス可シ其他總テ我カ

天皇陛下ニ於ケル式ト同一ナリトス又内外國ノ港内ニ在泊セル我カ

軍艦ニ來乗及ヒ退艦ノ時ニ於テモ其敬禮ノ式同一ナル可シ但シ大櫓  
頂ニ其固有ノ旌旗ヲ掲ク可シ

第二十條

外國ノ皇族我カ港灣ニ來著シ或ハ内外港内ニ於テ我カ軍艦ニ來乗ス  
ルキハ其艦ノ大櫓頂ニ其固有ノ旌旗ヲ掲ケ其他ハ總テ我カ皇族ニ於  
ケル敬禮ノ式ト同一ナル可シ

第二十一條

我カ諸軍艦内國ノ諸港ニ在テ同港在泊ノ外國軍艦ノ其本國ニ於ケル  
祭祝日或ハ外國ノ諸港ニ在泊シ該國ノ祭祝日及同港ニ在ル他ノ外國  
軍艦ノ其本國ニ於ケル祭祝日等ニ會スルノ時其外國ノ軍艦ニテ滿艦  
飾或ハ艦飾ヲ爲シ禮砲ヲ發シ又ハ堡砦砲臺ニ於テ禮砲ヲ發スル等彼



レヨリ告知アラハ我カ各軍艦ニテモ亦彼レト同時ニ同様ノ艦節ヲ爲シ禮砲ヲ發ス可シ其砲數ハ二十一發ヲ超ユ可カラサルモノトス但此禮砲ニハ其答砲ヲ要セス

第二十二條

太政大臣左右大臣及ヒ特命全權辨理大臣各公使領事ヘノ禮砲ハ各官職ニ從テ其砲數ヲ定ムル事左ノ如シ

太政大臣左右大臣

十九發

特命全權辨理大臣

同

特命全權公使

十五發

辨理公使

十三發

代理公使

十一發

總領事

九發

領事

七發

第二十三條

太政大臣左右大臣公務ヲ帶ヒ出行スルニ當リ特旨ノ命有ルニ於テハ其港出發及ヒ歸著ノキ堡砦砲臺又ハ港内在泊先任官乗組ノ軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス但同港ニ在泊セル數艘ノ軍艦ニ同日來乗スルキハ唯先任官乗組ノ一艦ヨリ禮砲ヲ發スルノミ又其軍艦ニ乗組航行スルキハ最初乗艦最後退艦ノ際トニ於テ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第二十四條

太政大臣左右大臣公務ヲ帶ヒテ乗組シ内外ノ軍艦或ハ軍艦ニ非サル諸船舶ニ於テ其乗艦ヲ表スルカ爲メ大橋頂ニ國旗ヲ掲クル事アルキ



ハ海上ニテ之ニ逢フ軍艦及ヒ其發著ノ港内ニ在泊セル先任官乗組ノ軍艦ハ必ス相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第二十五條

太政大臣左右大臣ニ對シ外國ノ軍艦ヨリ禮砲ヲ發スル時ハ同數ヲ以テ之ニ答砲ス其我カ軍艦ヘノ答砲ハ其官職相當ナル砲數ヲ以テス但シ指揮官ニ非サル大佐以下ノ艦長ハハ七發ヲ以テ答砲ス可シ

第二十六條

特命全權辨理大臣公務ヲ帶ヒ我カ領内禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺有ル地ニ著發スルキハ相當ノ禮砲ヲ發ス若シ軍艦ニ乗組ミ航行スルキハ最後退艦ノ際亦相當ノ禮砲ヲ發ス但シ此例ハ外國ノ港内ニ於テモ通用スルモノトス

第二十七條

特命全權公使ヘノ禮砲ハ唯其駐劄國ノ領内諸港ニ於テノミ發スルモノトス故ニ若シ軍艦ニ乗組ミ差遣セラル、國ニ航行スル時ハ其港内ニ到著上陸ノ時ニ非サレハ其軍艦ヨリ禮砲ヲ發セサル可シ

第二十八條

特命全權公使公務ヲ帶ヒ其駐劄國ノ領内諸港ニ在泊セル我カ軍艦ニ來乘スルキハ其退艦ノ際相當ノ禮砲ヲ發ス又領内ノ一港内ニ於テ同日我カ數艦ニ來乘スルキハ其内ノ一艦ノミ禮砲ヲ發ス且數回同艦ニ來乘スルモ禮砲ヲ發スルハ十二ヶ月ニ唯一回ナリトス其歸朝迎接ノ命ヲ受ケタル軍艦ニ乗組マハ其乘艦ノ際ノミ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第二十九條



辦理公使及代理公使へノ禮砲モ亦前二條ノ規則ニ同シ

### 第三十條

總領事及領事公務ヲ帶ヒ我カ軍艦ニ來乘スルキハ其退艦ノ際相當ノ禮砲ヲ發ス又數艘ノ軍艦ニ同日來乘スルモ第二十八條ノ例ニ準ス但此禮砲ハ其駐劄セル外國港内ニ於テノミ發スルモノトス

### 第三十一條

外國ノ大使及諸公使領事ニハ前數條ノ規則ニ準シ堡砦砲臺或ハ軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

### 第三十二條

陸軍卿及海軍卿へノ禮砲ハ其砲數ヲ定ムル事左ノ如シ

陸軍卿

十五發

海軍卿

同

### 第三十三條

陸軍卿及海軍卿公務ヲ帶ヒ禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺アル地ニ到著セルキハ其堡砦砲臺ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス又軍艦ニ來乘スルキハ發艦ノ時其軍艦ヨリ禮砲ヲ發ス若シ同港ニ於テ同日數艘ノ軍艦ニ來乘スルキハ退艦ノ際唯一艦ノミ禮砲ヲ發ス其軍艦ニ乗組ミ航行スルキハ其乘艦退艦ノ際ニ於テ其軍艦ヨリ禮砲ヲ發ス可シ

### 第三十四條

海軍卿公務ヲ帶ヒテ乘艦シ大橋頂ニ海軍旗ヲ掲クルキハ其港へ來著ノ軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス且軍艦海上ニ於テ此旗ヲ掲ケタル艦ニ相逢フモ其禮同シ又同艦我カ領内ノ港灣ニ到著スルキ港内ニ軍艦數



艘在泊セハ其内先任官乗組ミノ一艦ヨリ禮砲ヲ發ス可シ

第三十五條

陸海軍將官及ヒ大佐ヘノ禮砲ハ各官等ニ從テ其砲數ヲ定ムル事左ノ如シ

陸軍大將

十五發

海軍大將

同

陸軍中將

十三發

海軍中將

同

陸軍少將

十一發

海軍少將

同

陸軍大佐少將ノ代理

九發

海軍大佐 艦隊指揮

同

海軍大佐以下ヘノ答砲

七發

此將官及ヒ大佐海軍管轄場ノ指揮長官或ハ陸軍鎮臺ノ司令長官ヲ勤務スル時ハ本官相當ノ砲數ニ二發ヲ増加ス可シ

第三十六條

鎮守府ノ司令長官或ハ艦隊又ハ艦船ノ指揮長タル將官及ヒ大佐禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺アル地ニ到着シ初テ上陸スルキハ其堡砦砲臺ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス又鎮臺或ハ軍隊ノ指揮官タル陸軍將官及ヒ大佐公務ヲ帶ヒ軍艦ニ來乗セハ退艦ノ際其軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス然レモ此陸軍將佐同日同港ニ於テ數艘ノ軍艦ニ來乗スル時ハ唯其内ノ一艦ノミ禮砲ヲ發ス



第三十七條

前條ノ禮砲陸海軍ノ別ナク將佐官ニ對シ外國ニ於テハ十二ヶ月間ニ一回本國ニ於テハ三ヶ年間ニ一回トス若シ十二月或ハ三ヶ年ニ滿タスシテ其將佐ノ官等昇進スルキハ其年月以內ト雖モ昇進ノ官等ニ從テ其禮砲ヲ發ス但シ此禮砲ニハ其答砲スルコトナシ

第三十八條

海軍將官及ヒ大佐艦隊或ハ艦船ノ指揮官トナリ初メテ其艦ニ將旗或ハ代將旒ヲ相當ノ檣頂ニ掲ケ又ハ官等ノ昇進ニ因テ其旗旒ヲ換揚シ或ハ其職ヲ罷メ其旗旒ヲ下スキ該指揮官其港内ニ於テノ先任官タルキハ之ニ亞クノ先任官乗組ミノ一艦ヨリノミ之ニ相當ノ禮砲ヲ發ス若シ其港内ニ於テ該指揮官ヨリ上級官乗組ノ軍艦アルキハ之ニ對シ

該指揮官ノ乗艦ヨリ先ツ相當ノ禮砲ヲ發ス然レモ他ニ禮砲ヲ發スヘキ艦ナキ時ハ該指揮官乗組ノ艦獨リ禮砲ヲ發ス可キモノトス但該官在職中他ノ事故ニ依テ其旗旒ヲ揚ケ又ハ下スコトアルモ其禮砲ハ十二ヶ月間ニ唯一回ニ限ルヘシ

第三十九條

將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐初メテ先任官ニ會合スルキハ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ但シ艦隊指揮官タル大佐其指揮官ニ非サル先任大佐ニ相逢フ時ハ此例ニアラス

第四十條

將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐各自艦隊ヲ率キテ會合スルキハ唯各艦隊ノ先任將官又ハ指揮官タル先任大佐ノ一艦ヨリ此諸艦隊中最上官



タル將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ對シテハミ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第四十一條

凡ソ軍艦初メテ將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ會合スル時其將官或ハ大佐先任官タルニ於テハ之ニ對シ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ若シ二艘以上ノ軍艦同時ニ將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ會合スルキ俱ニ該官ノ所屬ナルキハ其内先任官乘組ミノ一艦ノミ相當ノ禮砲ヲ發ス但シ各自其所轄ヲ異ニスルキハ各自ニ禮砲ヲ發ス可シ

第四十二條

後任ノ將官又ハ艦隊指揮官タル大佐ヨリ海軍旗或ハ將旗又ハ代將旒ヲ掲ケタル艦ニ對シ禮砲ヲ發シタル時ハ該艦ヨリ此將官又ハ大佐ヘ

其官職相當ノ砲數ヲ以テ答砲ス可シ然レモ其禮砲ヲ發シタル士官艦隊指揮官ニ非サル大佐以下ナルキハ七發ノ數ヲ以テ之ニ答砲ス可シ

第四十三條

將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐又ハ艦長タル佐尉官二員以上ヨリ海軍旗或ハ將旗又ハ代將旒ヲ掲ケタル艦ニ對シ禮砲ヲ發シタルキハ受タル其砲數ヲ以テ該艦ヨリ唯一回答砲ス可シ假令モ其在職中數回ノ會合ヲナスト雖モ其禮砲ヲ發スルハ唯一回トス但シ官等昇進ニ由テ將旗或ハ代將旒ヲ換揚セルキハ此例ニ在ラス

第四十四條

艦長タル大中少佐及ヒ大中尉又ハ其他ノ士官ハ海軍ノ艦隊指揮官タル大佐或ハ陸軍少將ノ代理タル大佐ヨリ下等ノ士官ニ對シテハ外國



何レノ地方ニ於テモ禮砲ヲ發スル事ナシ

第四十五條

將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐又ハ艦長ニ對シ内國或ハ外國ノ商船ヨリ禮砲ヲ發シタルキハ一艘ノ商船ヘハ五發數艘ノ商船ヘハ七發ヲ以テ答砲ス可シ但シ他官省所轄ノ船舶モ之ニ準ス

第四十六條

外國ノ貴官及陸海軍省ノ長官或ハ將官又ハ指揮官タル大佐等ニ發スル禮砲ハ總テ我國ノ定制ニ照準ス若シ其諸官ト同官職タル我カ貴官及陸海ノ長官或ハ將官ニ對シ外國ノ軍艦ヨリ發シタル禮砲我國ノ定制ヨリ多數ナルキハ其外國ノ諸官ヘ對シテモ亦同數ノ禮砲ヲ發ス可シト雖モ其數十九發ヲ超ヘサルモノトス但シ此禮砲ニハ必シモ其答

砲有ルモノト期スヘカラス

第四十七條

外國軍艦ノ艦長タル大中佐我カ軍艦ニ公問スル時若シ嘗テ我カ軍艦ノ艦長タル大中佐其外國ノ軍艦ニ公問セシ時此軍艦ヨリ禮砲ヲ發シタル事アルニ於テハ其外國軍艦ノ艦長タル大中佐ニ對シテモ亦同數ノ禮砲ヲ發ス可シ

第四十八條

我カ軍艦締約國ノ港内ニ到著スル時ハ其國ニ對シ二十一發ノ禮砲ヲ發ス可シ但シ締約ニ非サル國ニ於テハ先ツ其港内ニテ彼レノ軍艦或ハ其地方官ニ禮砲ノ交換ヲナス可キヤ否ヤヲ照會シ其回答ノ旨ニ應ズ可シ但シ十二月ヲ經テ再ヒ同港ニ到著スル時モ亦同一ナリトス



然レモ若シ我カ先任官乗組ミノ軍艦既ニ其港内ニ在泊セハ其令ヲ受ク可シ

第四十九條

外國ノ軍艦我カ領内ノ港灣ニ到著シ我カ國ニ對シ二十一發ノ禮砲ヲ發スルキハ通常其地ノ堡砦或ハ砲臺ヨリ答砲ス可シト雖モ若シ事故アリテ其堡砦砲臺ニ於テ答砲スル能ハサルキハ其港在泊ノ軍艦ヨリ答砲ス可シ

第五十條

我カ軍艦海上ニ於テ將旗或ハ代將旒ヲ掲ケタル外國ノ軍艦ニ出會スル時其指揮官我カ軍艦ノ將校ヨリ上等ノ官職ナルニ於テハ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ但シ外國ノ港灣ニ於テ會合スル時ハ其地方ニ於テ發砲

ノ禁ナクハ海上同様ノ禮砲ヲ發ス可シ

第五十一條

我カ軍艦ニ對シ外國ノ艦船ヨリ先ツ其國旗或ハ上帆ヲ下スカ又ハ彼我同時ニ之ヲ下スニ非サレハ我カ軍艦ヨリ先ンシテ之ヲ下ス可カラ

第五十二條

外國ノ皇帝大統領或ハ皇族ニ對シ皇禮砲ヲ發シ又ハ其國ニ對シ二十一發ノ禮砲及ヒ答砲ヲ發スルキハ其時間彼レノ國旗ヲ大橋頂ニ掲ク又外國ノ艦船或ハ貫官ニ對シ禮砲及ヒ答砲ヲ發スルキハ其時間彼レノ國旗ヲ前橋頂ニ掲ク可シ若シ既ニ此大橋頂或ハ前橋頂ニ將旗又ハ代將旒ヲ掲ケアルキハ其大橋頂ニ掲ク可キ旗ハ前橋頂ニ掲ケ又前橋



頂ニ掲ク可キ旗ハ大櫓頂ニ掲クル事アルヘシ但シ答砲ハ本艦ノ禮砲  
終ルヤ否ヤ即時ニ發スルヲ以テ常トナス

第五十三條

總テ禮砲ハ信號或ハ其他ノ方法ヲ以テ所在ノ海軍指揮官ニ通告スル  
後ニ非レハ軍艦ヨリ之ヲ發スルヲナシ但シ其指揮官ニ對スル禮砲ハ  
此例ニ在ラス

第五十四條

禮砲ヲ發ス可キ數職ヲ兼任スル貴官ニ對シテハ其兼任ノ官等中最モ  
多數ノ禮砲ノミヲ發ス可シ

第五十五條

皇子ノ御降誕或ハ凱旋其他全國ノ慶賀アルキハ海軍省又ハ指揮長官

ノ令ニ依テ其禮砲ヲ發ス可シ

第五十六條

日出前日没後及ヒ日曜日ニハ禮砲ヲ發セサルモノトス但シ特別ノ事  
件若クハ長官ノ令有ルキハ此限ニ在ラス

第五十七條

總テ禮砲ヲ爲ス可キ海岸ノ砲臺ニ於テハ國旗ヲ掲ケ置キ禮砲或ハ答  
砲ヲ發スルニ其旌旗ヲ變換スルヲナカル可シ

第五十八條

砲臺及ヒ軍艦ヨリ同時ニ禮砲ヲ發スル時ハ砲臺ニ於テハ軍艦ノ禮砲  
第二發目ヨリ發砲ヲ始ム可シ

第五十九條



我カ艦船ト我カ領内ノ堡砦砲臺トノ間ニ於テハ何等ノ事件有ルモ其  
禮砲ヲ交換スル事ヲキモノトス

第六十條

締約國ノ皇帝皇后或ハ大統領ノ生誕日及ヒ重大ノ祭祝日ニ於テ該締  
約國ノ軍艦我カ港内ニ碇泊スルキハ其港ノ砲臺及軍艦ヨリ正午ニ其  
祝砲ヲ發ス可シ但シ其國ノ軍艦ハ碇泊セスト雖モ若シ他ノ締約各國  
ノ軍艦ヨリ之カ祝砲ヲ發スルキハ我カ砲臺及ヒ軍艦ヨリモ齊ク其祝  
砲ヲ發ス可シ

第六十一條

締約各國ノ軍艦數艘同時ニ入港シ各檣頂ニ我カ國旗ヲ掲ケ二十一發  
ノ禮砲ヲ發シタルキハ同數ヲ以テ砲臺ヨリ一國毎トニ答砲ヲ發ス可

シ又我カ貴官外國ノ軍艦ヲ訪問スルニ當リ其軍艦ヨリ該官ニ對シ禮  
砲ヲ發シタルキハ其砲臺ヨリモ同數ヲ以テ答砲ス可シ但シ訪問スル  
以前豫メ該官ヨリ其砲臺ニ告知ス可シ



海軍禮砲數表

二十一發	天皇 太上天皇 太皇太后 皇太后 皇后 皇太子 皇太子妃 皇子 皇女 親王	○クラウンヘッド ○サアリン ○ブリンス ○ビスコンソルト ○プレシデントオブアレ プリカン
十九發	太政大臣 左右大臣 特命全權辨理大臣	○アンズセグール ○ロード、ハイ、アドミラル ○ロー、コミ、ツシヨナ スホール、エキスキユウチ シタ、ゼオツビス、オプ、ロ ー、ハイアドミラル ○コンマンダシ、イン、チ フ ○オッシュンヤード、コ、リ ンダシ、イン、チーフ、 ○ホール、アー、メー、オプ、エ ナイ、テ、ツ、ド、キン、シ、ド、ム
十七發		○アドミラル、オプ、フリー ト ○フヒール、ド、マーシヤル
十五發	大 陸 軍 將 中 海 軍 卿 卿 特命全權公使辨理公使代理公	○フアースト、ロ、ド、コ、ミ ツシヨナ、オプ、アドミラ ル、タイ ○アドミラル、ゼ、チ、ラル、 ○エンボイス、エキストラ オル、チ、リ ○ミニスター、プレニ、モ、タ ソ、リ、ヤ、リ ○ヘン、モ、タ、ス ○ミニ、モ、タ、ス
十三發		○ウ、グ、イ、ス、ブ、アドミラル ○リ、ウ、チ、シ、ン、ト、ゼ、チ、ラル ○ミニ、モ、タ、ス、レ、ヂ、ヂ、ヂ、ン、ト、
十一發	將 少 代理公	○リール、アドミラ ○メ、ヂ、ヨール、ゼ、チ ○チ、ヤ、ー、シ、ド、ア、フ ス ○サ、ブ、ヂ、チ、ー、ド、ヂ チ、ツ、ク ○エ、ー、ゼ、ン、ト、レ、フ チ、ヤ、ー、リ、ヂ、ヂ、ヂ、ヂ、 ス

大將以下一軍或ハ一艦隊ヲ指揮スルハ其官相當ノ數ヲ定



官ノ數ハ定ヲ以テニ發ヲ増ス 此ノ數ハ定ヲ以テニ發ヲ増ス	少將 代理公使總領事領事 少將代理領事 艦長へ答砲 商船ニ對シ 答砲二船以 上ナルハ 七發	一十一發 九發 七發 五發
	大佐艦隊指揮 陸軍少將代理 艦長へ答砲	九發
	艦長へ答砲	七發
	商船ニ對シ 答砲二船以 上ナルハ 七發	五發



第百拾貳號

使廳府縣

銃砲彈藥賣買等當分ノ内嚴禁候旨本年十月第百五號ヲ以テ相違置候處自今解禁候條此旨可相達候事

明治九年十一月二十八日

太政大臣三條實美



第百拾三號

院省使廳府縣

本年第六十四號旅費定則左ノ通改正増補候條此旨相違候事  
但京都大坂間汽車賃給額ノ儀ハ本月十五日ヨリ施行候儀ト可相  
心得事

明治九年十二月十一日

太政大臣三條實美

旅費定則

内國ノ部

第二章

一陸路旅費ヲ三分シテ云々



(増補)第十項 並旅行ハ一日拾里詰ト定ムルト雖モ御用柄ニヨリ百

里ノ行程ヲ十二三日ニ旅行スルカ如キ事實不得止節ハ右増

日數ニ應シ表面ノ通滯留日當ヲ給スヘシ

(同)第十一項 地方出張ノ者甲乙丙ノ各地ヘ兼行スルキハ都テ本

廳ヨリ内地迄ノ片道里程ヲ通算シ途中尙各地ヘ立寄トモ別

段區分セス内地迄ノ里程ヘ合算シ十里詰ノ割ヲ以テ旅費日

當支給スヘシ

第五章

一東京横濱及ヒノ下(京都)ノ二字ヲ増補ス

(増補)第一項 京都ヨリ神戸ニ至ル瀛車ハ一線路ニ付滯留日當ハ本

章ニ準シ支給スヘシ

(同)第二項 赴任及ヒ免職歸郷ノ者ハ表面赴任瀛車賃及ヒ賄料ト

シテ滯留日當ノ額ヲ支給ス

(同)第三項 東京横濱并京都大坂神戸間ノ線路中間ノステーションヨ

シヘ東京ヨリ神奈川迄大坂ヨリ西宮迄京都ヨリ茨木迄ノ類行旅スルモノ赴任ハ陸路

三里以上ヨリ並旅行ハ片道六里以上ヨリ本章ニ準シ六里未

滿ハ第二章第四項ニ準シ往返ニテ表面瀛車賃及ヒ滯留日當

一箇ヲ給ス尤下車ノ上陸路一里以上經過スルモノハ此例ニ

アラス

第十章

一給仕小使諸職人云々

(増補)六拾錢

京都間瀛車賃



第十五章

(改正)

一並旅行ヨリ晝夜急行ニ轉スル如キハ總里數ヲ十里毎ニ區分シ其  
 十里ノ内互ニ相跨ル里數ハ總テ旅費額ノ多キ方ヲ以テ支給スヘ  
 シ十里未滿ノ旅行モ亦之ニ准ス

第一項 從前ノ通

内國旅費日當表追加

官 旅 費	官 級	勅 任		奏 任	判 任	等 外
		一 等	二 等			
東京 四圓	大阪 四圓	從前之通	同	同	同	同
全赴任旅費	片道旅費	金四圓九拾五錢	金四圓七拾五錢	金四圓七拾五錢	金四圓五拾五錢	金四圓五拾五錢
京都 四圓	大阪 四圓	金四圓三拾錢	金四圓	金四圓八拾錢	金四圓	金四圓五拾五錢
全赴任旅費	片道旅費	金五圓九拾五錢	金五圓五拾五錢	金五圓七拾五錢	金五圓六拾五錢	金五圓六拾五錢
京都 四圓	大阪 四圓	金四圓三拾錢	金四圓	金四圓八拾錢	金四圓	金四圓五拾五錢



外國旅費表中

船客料

(自橫濱  
至何々)

トアルヲ

(自内地開港場  
至何々)

ト改ム



工部省各科工術等級左ノ通改定候條此旨相達候事

明治九年十二月十三日

太政大臣三條實美

- |           |    |
|-----------|----|
| 一等技長      | 四等 |
| 二等技長      | 五等 |
| 三等技長      | 六等 |
| 四等技長      | 七等 |
| 但上師以下從前ノ通 |    |



第百拾五號

院省使廳府縣

徵兵年齡相當ノ中徵兵連名簿ヘ記載ノ丁壯ニ限リ其年十二月二十五日ヨリ翌年四月二十日迄ノ間ハ官吏ヘ採用不相成候條此旨相違候事

但免役規則ニ適スル者ハ採用不苦候得共本文ノ月日間ニ係ルモノハ一應其本管廳ヘ照會ノ上採用可致事

明治九年十二月十八日

太政大臣三條實美



第百拾六號

院省使廳府縣

大藏省職制章程中左ノ通改正候條爲心得此旨相違候事

明治九年十二月十九日

太政大臣三條實美

上款

第五條 政府金穀ノ統計ヲ公布スル事

下款

第二十四條 税關輸出入ノ統計表ヲ製シ貿易ノ盛衰ヲ示ス事



大政官廳... 明治九年十二月二十一日... 太政大臣三條實美

第百拾七號

開拓使及沿海府縣

從來浦役人ノ名稱有之候得共其事務ノ定限モ無之ニ付自今左ノ條款ニ從ヒ浦役場ヲ設置シ浦役人ヲ命スヘシ此旨相違候事

明治九年十二月二十一日

太政大臣三條實美

第一條 浦役場ハ沿海大市及ヒ商船輻湊ノ地ニ於テハ便宜ノ場所ヲ撰テ之ヲ設置スヘシ

第二條 浦役場ハ當分ノ中區務所等ヲ以テ代用シ浦役人ハ區長若クハ戸長ニ兼勤申付書記用掛等ヲシテ補助セシムヘシ

第三條 浦役人ハ其地繫泊船ニ關スル庶務警察事務稅關事務其他主管アル事務ヲ除キ



及ヒ難破船取扱難破浦証文付與等ノコヲ掌ラシムヘシ

第四條 浦役場設置ノ地名ハ明治十年三月三十一日限り内務省ニ報告シ以後毎年十二月中ニ其廢置變換等ヲ同省ヘ報告スヘシ

第百拾八號

使府縣

今般修史局ニ於テ藩史編輯候ニ付管下士民ノ私撰私記總テ舊藩内事蹟ニ關スルモノ藩籍奉還迄ノ書類並ニ舊藩士中名族古家譜牒類等悉皆取調書名冊數並所持主人各相記シ早々修史局ヘ可差出此旨相達候事

但官庫ニ有之書目別紙ニ記載致シ候分ハ差出スニ不及候事

明治九年 十二月二十二日

太政大臣三條實美



總集類

- |          |      |
|----------|------|
| 一本朝武林傳   | 二十五本 |
| 一本朝列侯傳   | 二十本  |
| 一武家列傳    | 十五本  |
| 一諸將連續記   | 十六本  |
| 一當武枝葉集   | 二十五本 |
| 一參考諸家傳   | 五本   |
| 一武家事記    | 五十二本 |
| 一古今武家盛衰記 | 十五本  |
| 一續武家盛衰記  | 十三本  |
| 一武家盛衰纒拾錄 | 二本   |



一 改撰武家盛衰記附錄	一 本
一 中興武家盛衰記	十五 本
一 續武家評林	二十二 本
一 武家勸懲記	三十七 本
一 諸家興亡記	十 本
一 廢絕錄	一 本
一 恩榮錄	三 本
一 家盛	一 本
一 家衰	一 本
一 前車後語集	九 本
一 遠近諸士記	五 本

一 堪忍記	一 本
一 武門諸說拾遺	二十 本
一 談海	五 本
一 談海集	三十五 本
一 續談海	三十一 本
一 盈筐錄	四百 本
一 續盈筐錄	百十四 本 一本欠
一 玉滴隱見	二十 本
一 武野燭談	十三 本
一 明良洪範	十二 本
一 續明良洪範	十二 本



一 武家閑談	七	本
一 續武家閑談	十	本
一 兵家茶話	十	本
一 續兵家茶話	三	本
一 武林隱見錄	六	本
一 續武林隱見錄	十	本
一 鶴の毛衣	十三	本
一 月堂見聞集	二十九	本
一 治國壽夜話	二十	本
一 校合雜記	四十	本
一 常山記談	三十	本

四

一 落穂集	三十	本
一 異本落穂集	五	本
一 落穂餘談	六	本
一 武家秘錄	七	本
一 武家禁秘錄	十一	本
一 諸家大秘錄	六	本
一 近代大秘錄	五	本
一 極秘錄	一	本
一 武林珍談集	十	本
一 翁物語	三	本
一 翁物語後集	六	本

五



- 一武者物語
- 一新武者物語
- 一武邊咄間書
- 一武隱叢話
- 一中古武名記
- 一武邊雜談
- 一茶飲夜話集
- 一志士清談
- 一老士物語
- 一故老清談
- 一古老物語

三 八 六 十 二 二 一 一 一 二 一  
 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本

- 一老話集
- 一額波集
- 一葛藤別紙
- 一閑窓慎話
- 一故諺記
- 一昔昔物語
- 一野翁物語
- 一童問
- 一當世珍說要秘錄
- 一世評留書
- 一反古撰

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本



一見聞書	一千代見草	一異說區區	一中村氏筆記抄	一會合雜記	一枯木集	一窓の須佐美追加	一窓能寸佐美	一山下秘錄	一公事餘筆	一古事記囊
五	二	二	二	三	五	二	一	五	四	五
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本

一看益集	一卷說秘鑑	一武陽禁談	一正傳珍語鏡	一龍溪正小說	一渡邊幸庵對話	一古老物語拔萃	一遺老物語	一鶴頭夜話	一寧固齋談叢	一武功雜記
二	三	四	二	五	二	一	十	五	六	十
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本



一 南山老話	三	本
一 武事記談	一	本
一 武林要話	三	本
一 古井の理草	一	本
一 悲歎物語	一	本
一 近古武事談	三	本
一 世事見聞錄	三	本
一 世說海談	十	二本
一 蛎魚殘篇	十	八本
一 及聞秘錄	十	八本
一 雜事記	三	十九本

十

一 栗園漫抄	四	十一本
一 翁艸	五	十一本
一 雜話燭談	七	十八本
一 雜話筆記	二	十本
一 又	十	三本
一 後編雜話筆記	二	本
一 野藪談話	二	十八本
一 掃聚雜談	四	本
一 周覽餘流	三	本
一 山角氏覺書	三	本
一 近世記聞	六	本

十一



一 續近世記聞	五	本
一 觀惠交話	二	本
一 古事談	二	本
一 泰平年表	一	本
一 續泰平年表	十	本
一 近世外史	五	本
一 坤儀革正錄	五	本
一 高岡義實聞集錄	百	本
一 雜記 櫻井能監	三	本
一 世古延世雜記	廿	本
一 鈴木大雜集	三	本

一 某新聞紙	五	本
一 晚翠樓叢書	一	本
一 晚翠樓叢書 銀山新話	一	本
一 小宮山綏介筆記	二	本
一 加川勝敏藏書	二	本
一 如是我聞	五	本
一 黑川秀波雜記	一	本
一 吉田温苗聞見錄	一	本
一 時勢見聞錄	三	本
一 朝野風說書	二	本
一 有所不爲齋叢書	三	本







一 延享世說	一	本
一 寬延世說	二	本
一 寶曆廣說集	一	本
一 寬政秘鑑	一	本
一 文政雜記	四	本
一 天保雜記	五十六	本
一 弘化雜記	十三	本
一 嘉永雜記	十	本
一 安政雜記	十六	本
一 嘉永明治年間錄	十六	本
一 文久記事	九	本

十六

一 元治記事	十四	本
一 元治戰爭記	三	本
一 元治 <small>イロテリ メテリ</small>	十	本
一 慶應 <small>イヨテリ メヨテリ</small>	十	本
一 水野直助慶應紀事	一	本
一 安政 <small>文久 慶應</small> 記事	四十三	本
一 甲子塘報錄	四	本
一 乙丑塘報錄	一	本
一 丙寅塘報錄	一	本
一 塘報錄外篇	十三	本
一 孝義錄	五十	本

十七



一名節錄	三	本
一婦女節義錄	一	本
一昭代逸事初集	一	本
一伊賀上野 山城日岡	一	本
一但馬村岡	一	本
復讐實記		
一石井遂志錄	一	本
一復讐三家遺事	一	本
一田宮物語	二	本
一東毛復讐始末	一	本
一鎌倉道敵討物語	一	本
一淺田復讐記	一	本
一姉妹復讐	一	本

一落原拾葉	二十三	本
一鎮西志	二十四	本
一明德記	一	本
一應仁記	一	本
一應仁別記	一	本
一鎌倉管領九代記	十一	本
一細川賴之記	一	本
一細川兩家記	二	本
一大內義隆記	一	本
一信長記	五	本
一太閤記	十九	本



一 北條五代記	七	本
一 浦上宇喜多記	一	本
一 龍造寺記	一	本
一 瀧生記	三	本
一 氏郷記	一	本
一 清正記	五	本
一 肥陽軍記	三	本
一 淺井軍記	二	本
一 甲陽軍鑑	十	本
一 信玄全書	十	本
一 河中島戰記	一	本

一 三好記	一	本
一 諸國合戰畧記	一	本
一 武家物語	五	本
一 近世政秘錄	三	本
一 文化律	三	本
一 公政秘抄	一	本
一 武家嚴秘錄	十	本
一 池の藻屑	六	本
一 武德通覽	三	本
一 御日記	六	本
一 日次記 一名大坂日記	六	本



一 警中御日記	二十八本
一 後淨明珠院殿御記	四本
一 寬文三年記	一本
一 難波宗城卿記	一本
一 難波宗建卿記	六本
一 正保遺事	一本
一 榮枯物語	八本
一 四海太平記	十八本
一 三朝逸事	八本
一 南山舊話記	一本
一 流澤遺事	一本

一 丕續後鑑	三本
一 陸沉奇談	一本
一 長岡聞書	一本
一 月夜友	一本
一 諸侯賢行錄	一本
一 明君賢行錄	一本
一 中古日本治亂記	六十五本
一 續太平記	三十二本
一 諸家前太平記	十五本
一 本朝列國志 <small>前編後編</small>	三十七本
一 古士談話	五本

正德六年刊



一 東國太平秘 寬永三年刊 十七本

一 丕續後鑑附錄 一 本

一 ひそくばなし 十二本

一 陣警日記 一本

一 萬話史草 十本

一 耳ふくろ 三本

一 礦石集 元祿六年刊 六本

一 本朝國語 五本

一 歷代荃宰錄 寬文七年刊 九本

一 東遊雜記 五本

一 尙古年表 七本

一 柳營年表秘錄 三本

一 御代々文庫表 五本

一 諸家系圖纂 七十一本

一 諸家系譜 四百八十三本

一 改選諸家系圖 百二十七本

一 諸國城之圖 八折

一 三崎志 一本

一 御領國舊記拔書附 粵中舊記 一本

一 御領内古城跡諸川高山記 一本

一 諸國廢城考 十本

一 扶桑城圖記 三本



一 明道館圖	一	鋪
一 堀村垣廻浦申上記	二	本
一 鈴木叢書	十	四本
一 鳥海叢書	二十	二本
一 日本大典	十	八本
一 官職便覽	一	本
一 諸藩學政	四	十本
一 大成經本紀	四	本
一 日本歷史畧	四	本
一 本朝歷史畧評註	二	十五本
一 日本春秋	二	十五本

一 編年小史	七	本
一 國史實錄	二	十五本
一 帝王秘記	十	三本
一 八朝紀聞	五	本
一 國史 <small>堀田正順編</small>	二	十七本
一 日本古今人物史	三	本
一 本朝列侯傳	二	十六本
一 近世人鏡錄	十	本
一 扶桑禪林僧寶傳	五	本
一 壺範記	一	本
一 遺愛志	一	本



一 義奴傳		刊	一	本	二十八
一 足輕彌五丞孝行記事			一	本	
一 高岡村市衛門夫婦孝弟記事			一	本	
一 皇朝事苑	天明七年刊		四	本	
一 諫爭玉女苑			三	本	
一 歷代名臣要覽	寬政二年刊		三	本	
一 歷代名臣要覽	寬政三年刊		五	本	
一 續皇居年表			九	本	
一 日本輿地通誌	享保年間刊		二十五	本	
一 國史姓名譜			十五	本	
一 事纂			十九	本	
一 湖海新聞			十	本	



坊間刊本

一 國史肇要

一 國史畧

一 續國史畧

一 續國史畧後編

一 續續皇朝史畧

一 日本畧史

一 日本新史畧

一 本朝畧史

一 續大東史畧

一 內國史畧

十六本

五本

五本

五本

七本

四本

六本

三本

二本

四本



一 近世事情  
一 近代月表

一 五  
本 本

三十一

第百拾九號

院省使廳府縣

賞勳事務局自今賞勳局下稱候條此旨相違候事

明治九年十二月二十六日

太政大臣三條實美



第百貳拾號

院省使廳府縣

本年<sup>六月</sup>第六拾四號達旅費定則中內國ノ部へ左ノ通道加候條此旨相  
達候事

明治九年十二月廿七日

太政大臣三條實美

第二十一章

一 百里外

行幸 行啓ノ節供奉ノ者へ支度料左ノ通支給スヘシ

太政大臣

左右大臣



金三百圓

一等官

金貳百圓

二等官

三等官

金百五拾圓

奏任官

金百圓

判任官

金五拾圓

等外吏

金拾五圓

但五十里外供奉ノ者ハ本文金額ノ三分ノ二ヲ給ス



第百貳拾壹號

司法省  
使府縣

租税不納ノ者身代限り處分ノ儀ニ付地方廳ヨリ裁判所へ掛合ノ節  
其通牒狀ハ通常ノ公文用紙ヲ用ヒテ訴訟用罫紙ヲ用フルニ及ハス  
候條此旨相達候事

明治九年十二月二十八日

太政大臣三條實美







